

のか？。住民は其所を去りつゝあつた、退却する軍隊が莫斯科に満ち／＼て居た。何うして、民衆がその爲めに暴亂しさうだといふことになるのであつたのか？。

莫斯科のみならず、露西亞ちうの孰れの場所でも、敵の近付て來たが爲めに、暴動らしいものが起つたといふ例は一つも無かつたのだ。十月の一日と二日には、十萬以上の人民が莫斯科に残つて居た、が、總督の廣庭に、總督自らに依つて引き寄せられた民衆が、集まつた以外には、何の騷擾も無かつたのだ。

若し、ポロディノの戦後、莫斯科の開城が確定事實となり、若くは、少くともそれが有りさうなことゝなつた時に、ラストオプチンが、一切の聖遺物、彈藥、彈丸、及び國庫を移す處分に出でると共に、揭示を出したり、武器を配分したりして、民衆を昂奮させるやうなことを爲すに、市が放棄されることになつたことを、人民に率直に告げたとしたらば、民衆の間に騷擾が起りさうな理由は尙一層少かつたことは明白なことなのだ。

性急な、血性男兒であつたラストオプチンは、これまで何時も高官の社會をのみ動いて來たので、感情に於ては愛國者ではあつたが、彼が自分で治めて居ると想像して居た人民の性質を少しも知つて居無かつたのであつた。敵が始めてスモレンスクへ入つた時から、ラストオ

プチンは、彼自身の想像の裡で、民衆の感情——露西亞の眞心——の指導者の役割を勤めて居たのであつた。彼は——何の露西亞の官吏も何時でも想像する通りに——自分が莫斯科の人民の外的行爲を制御して居るのだと想像して居たのみならず、尙その上に、自分が卑俗な、下等な混ざり言語で書いた自分の檄文や揭示で以つて、民衆の心的態度を造りつゝあるのだと、想像して居るのであつたが、焉んぞ知らん、さういふ雜り言語こそは、人民が自分自身の間では、非常に蔑んで居るものであつて、さういふ言語を高位の人々から聞くといふと、唯だ理由もなく、解し得無いものなのだ。民衆の感情の指導者といふ如何にも繪畫的な形が、餘りラストオプチンの氣に適り、又、彼は、餘りその氣でばかり居たので、莫斯科を放棄し無ければならぬ必要、それを敵の手に渡さなければならぬ必要は、彼に取つては、全然不意の事實であつた。彼は、自分の立つて居る地面が、自分の足下から滑つて行つてしまふやうな氣がした。彼は、全く策の出るところを知ら無かつたのだ。

彼は、さう爲つて來つゝあるとは知つては居たけれども、いよ／＼といふ最後の刹那までは莫斯科の放棄を本當に信ずることが能き無かつた、で、それに對しては、何も爲無かつた。住民は、彼の意に反して市を去つたのであつた。法衛が移されたとしても、それは、官吏たちの



主張にのみ基づいたものであつて、ラストオブチンは、その主張に不承々々譲歩したといふに過ぎ無かつたのだ。

彼自身は、自分が執つた役割の爲めに全く心を占領されて居た。熱した想像力を持つて居る人々に屢々ある通りに、彼は、最早餘程前から、莫斯科が放棄されることは知つて居た、けれども、彼は、それを彼の智力で知つて居たばかりで、それを信ずることは全心靈を以つて拒んだ、そして、事態のその新位置に心的に自分を適應させ得無かつたのだ。

彼の骨折と、手強い活動の全方向は——それが何れ程まで人民に利益であつたか、或は、それが何れ程まで人民に影響したか、といふやうなことは、又別の問題なのだが——彼自身の心を占領して居た感情——即ち、佛蘭西人に對する憎悪と、自分に對する信任——をば、人民の心の裡に起させることに向けられて居た。

が、大事件が、その眞の歴史的の大きさになり始めるといふと、佛蘭西人に對する憎悪を言辭で云ひ表すだけでは全く足り無くなるといふと、その憎悪を戦で以つてすら表すことが不可能になるといふと、莫斯科に迫つて來て居る唯だ一つの問題に關しては、自信が何の役にも立た無くなるといふと、全住民が、一人のやうになつて、各自の財産を捨て、置いて、莫

斯科から流れ出して、斯ういふ消極的な風で、各自の愛國心の強さの證據を見せるやうになるといふと——さて、さうなると、ラストオブチンが演つて居た役割は、不意に無意味になつた。彼は、立つべき地面が無くなつて了まつて、不意に捨てられたやうで、弱い、愚劣らしい者になつたといふ氣が爲た。

睡眠から起されて、クツクツの冷々とした、命令的な書面を讀ませられて、ラストオブチンは、腹が立てば立つ程、ますます自分が悪かつたことを感じたのであつた。未だ、莫斯科に、彼の管理の下にある一切の物が残つて居た、職務上彼が安全な所へ移して了まは無ければならぬ一切の政府の財産が残つて居た。それを悉皆移して了まひやうは何うしても無いのであつた。

「誰の咎なんだらう？。一體、誰が斯ういふ窮境にならせたんだらう？」と、彼は、怪しんだ。「勿論、俺が爲たことでは無い。俺は、何も彼も、いざといへば間に合ふやうに爲て置いたんだ、俺は、莫斯科を俺の手で確手押へ付けて居たのだ——斯ういふ風にな。所が、見ろ、奴等は事態を飛んでも無いところへ持つて來たぢやア無いか。悪黨奴等、謀叛人奴等」と、彼は思つた、が、彼は、誰々が悪黨で謀叛人であつたのか確には極めずに、唯だ、彼がその時自身自身を見出したその本當で無い、愚劣々々しい位地に對する責任を負ふべきさういふ漠然と彼



が想像した謀叛人どもを憎ま無いでは居られ無必要を感じたので、さう思つたのであつた。その夜ちう、ラストオブチンは、種々な命令を出して居た、さういふ命令は、莫斯科の有らゆる部分から、人民が請ひに來たものであつたのだ。伯爵が、その夜程、陰鬱で、怒りつぽかつたことは、彼の下僚たちの未だ嘗て覺えの無いことであつた。

「閣下、實産省から、長官からご命令を聞きに参りました」——「宗教法院から」——「元老院から」——「大學から」——「孤兒院から」——「司教が使をよこしました」——「伺ひに」——「消防隊には何ういふご命令が出ますか」——「典獄でございます」——「顛狂院長」——夜どほし、間斷無く、使が、伯爵の所へよこされた。

さういふ一切の尋問に向かつて、ラストオブチンは、簡單に、腹立つた返答を與へた、その要項は、彼の命令は最早要ら無いといふこと、彼の總ての注意深い準備が誰か知らの爲めに最早全く破されて了まつたこと、それから、その誰か知らが今起るべき何事に對しても一切の責任を負ふべきであらうといふこと、などであつた。

「うん、彼の愚人にな」と、彼は、實産省からの尋問に對して答へて、「止まつて、自分の權利書類を番して居れと云つて遣れ。おい、消防隊のことは、何といふ愚劣なことを、お前は尋

くかい？。彼所には馬が何匹もある、ヴラディイミルへそれをやつちまうが宜い。佛蘭西人に置つてやつちやア不可」

「閣下、顛狂院が参りました、何うご命令になりますですか？」

「俺の命令？。悉皆追ひ放しちまへ。唯だそれだけなんだ……それで、狂人どもを町へ出しちまへ。狂人どもが軍隊の指揮を爲て居る時節柄、狂人どもが釋放されるのが神の御意なんだらうよ」

監獄の囚人を何うするかといふ尋問に對しては、伯爵は、典獄に甚く怒號つた——

「何だ、二大隊の兵でも使つて奴等を護送しやうといふ積りなのか、愚劣なことだ、大隊なぞ一つだつて有りはせんぞ。悉皆追ひ放しちまへ、それで宜いんだ」

「閣下、政治犯が幾人か居ります——ミイェシコフとか、ヴェレンシチャアギン……」

「なにヴェレンシチャアギン。奴未だ絞殺され無いで居るのか？」と、ラストオブチンは叫んだ。「奴を此所へ伴れて來い」



軍隊が莫斯科を通り抜けて居た朝の九時頃には、ラストオブチンの所へ命令を聞きに来る者は無くなつた。去ることができた者は、誰も彼も、許可を請はずに去りつゝあつた、止まつた者どもは、何うすれば宜いか、自分等自身で極めたのだ。

伯爵ラストオブチンは、ソコルニキイへ行かうと思つて、馬を命じた、そして、黄色い、髯んだ顔で、彼の書齋で腕を拱んで、黙つて坐つて居た。

静謐な時の官吏は、誰も彼も、自分の治下の全人民は、自分の努力に依つてのみ動かされて居るのだと感ずるものだ、で、有らゆる官吏が、自分等の勞力や配慮に對する主な報償を見出すのは、自分等が何うしても無ければならぬ人間だといふその感のうちに於てなのだ。歴史の大洋が穩である間は、棒一本で以つて、自分の搖盪する小さい舟から、人民といふ大船へ絶つて、それと共に動いて居る官吏が、自分が絶つて居る大船を自分の方が動かして居るのだと、想像せざるを得ないことは、容易に首肯されることなのだ。が、一朝暴風雨が、海波を高め、船をその上で盪搖しだすといふと、前のやうな考慮違ひは直ぐに不可能になるのだ。大船は、その大きい進路を勝手に進み、棒は動いて行く大船に達か無くなつて、水先案内者は、主人とか、力の源泉とかいふのでは無くなつて、爲方の無い、弱い、無用な人間になつたこと

が、自分にも氣が付くのだ。

ラストオブチンは、それに氣が付いた、で、そのことが彼を殆ど狂亂させた。群集から遁れて來た警務長が彼に逢ひに入つて行くと、それと同時に、馬の支度が出来たと知らせに來た副官と一緒に居た。兩人とも蒼くなつて居た、警務長は、自分の任務を果たしたことを報告した後で、伯爵ラストオブチンに、人民の非常な群集が、廣庭へ來て、彼に逢ひ度いと云つて居ることを、知らせた。

何とも返答せずに、伯爵ラストオブチンは起つて、速歩で、彼の明るい、立派な道具を備へてある客室へ、歩み込んだ。彼は露臺の戸へ行つて、戸の柄手を取つたが、直ぐそれを放して、窓へ行つた、其所からの方が群集が善く見えたのであつた。

背の高い若い男が、先頭に立つて居て、嚴ぶかしい顔をして、腕を振り廻して、何か云つて居た。血だらけな鍛冶は、陰氣な風付で、その傍に立つて居た。閉まつた窓越しに、聲の轟が聞えた。

『馬車の支度は宜いか?』と、ラストオブチンは云つて、窓から退つた。

『宜しうございます、閣下』と、副官が云つた。



ラストオブチンは、再露臺の戸へ行つた。

「おい、何うして呉れと奴等は云ふのかい？」と、彼は、警務長に尋いた。

「閣下、彼等は、閣下のご命令通りに、佛蘭西人と戦に行く爲めに、一緒になつて参りましたのです、彼等は、何ですか欺まされたなど、叫んで居ります。けれども、怒つて居る群集でございますよ、閣下。私は艱然のことで通じて参つたんです。え、斯う申しあげては何ですが、閣下……」

「何卒、捨て置いてください、私は、君に尋かんだつて、自分の爲べきことは知つとるよ」と、ラストオブチンは、憤然と叫んだ。彼は、露臺の戸口に立つて、群集を見て居た。「露西亞は到頭此様なにされて了まつたんだ。俺も此様なことにされて了まつたんだ」と、ラストオブチンは思ふと共に、今起りつゝある事柄の責任を歸することの能きる誰とも極まら無い者に對して、制へられぬ憤懣が、胸元へ突つかけて來るのを感じた。激し易い人には有り勝ちな通りに、彼は、激怒に心を占領されて居ながら、尙且それを漏らす相手を探して居るのであつた。「此所に民衆、人民の滓が居る」と、彼は思つて、群集を見て、「これは、奴等が、奴等の愚劣なやり方でもつて、動搖させた者どもなんだ。此奴等は、贅が欲しいんだ」と、いふ考慮が、

彼が、先頭に立つて居る背の高い男の振つて居る腕を見て居るうちに、彼の心へ出て來た。彼の考慮は、全く、彼が自分でも又、贅、即ち、自分の憤怒を漏らす目的物が欲しかつたが爲めに、彼の心にと出て來たのであつた。

「馬車の支度は宜いか？」と、彼は再尋いた。

「宜しうございます、閣下。ヴェレンチャアギンのことは何う致しませう？ 彼者は昇降段で待つて居りますんですが」と、副官が答へた。

「うん」と、何か不意に憶ひ起したかのやうに、ラストオブチンは叫んだ。

で、手速く戸を開けて、彼は斷手として露臺の上へと歩み出た。話聲がバツタリ止んだ。さまくく帽子が擧げられた、そして、總ての眼が總督の上へ擧げられた。

「好く來たな、若者たち」と、伯爵は、聲の高い、速語で云つた。「好く來て呉れたな。私は今直ぐ其斯へ行くぞ、けれども、その前に、罪人を一人處分し無ければならんだ。吾々は、その者のお蔭で莫斯科が破滅させられたといふ惡漢を罰し無ければならんだ。待つて居て呉れ」で、出たと同なじやうな速さで、戸を烈しくドタンと閉めて、部室へ歸つた。

満足した賛同の咳きか、群集の間を亘つた。「彼の人は、謀叛人を残らずやつ付けて了まうん



だせ、勿論。お前たちは、佛蘭西人の事を云つてゐるがね……彼の人は、白黒を全然極めて呉れるんだい」と、人民は、自分等が信じ無いのを相互に責め合ふとでもいひさうにして、云つた。二三分経つと、一人の將校が、正面入口から急いで出て来て、何か命令を與へた、と、龍騎兵等はツンと真直になつた。群集は、露臺の前から正面入口へとヒシ／＼と詰め掛けた。其所へ、急いだ、腹立たしげな歩き振りで出て来て、ラストオブチンは、誰かを探すかのやうに、忙がし氣に身邊を見廻した。

『何處に居る？』と、彼は云つた、そして、さう云つた途端に、彼は、二人の龍騎兵の間に挟まつて家の角から出て来た、長い瘡せた頸の、頭の半分が剃られて、短かい髪で蓋はれて居る一人の若者を見付けた。この若者は、往時には洒落れたものであつたが今は見すばらしくなつて居る狐皮の裏の付いた淺黄布の外套を着て居、穿いて居る綾織綿布の汚れた囚人下袴の裾は汚いクチャ／＼になつた長靴の中へ押し込まれて居た。その歩き振りのたど／＼しかつたのは重い足枷が彼の瘡せた弱い兩脚から垂ら下がつて居た爲めであつた。

『あゝ』と、ラストオブチンは云つて、急いで眼を、狐皮裏の外套の若者から、背けて、昇降段の下の方を指した。『此所に立たせろ』

足枷をがちや／＼いはせて、若者は、指された段へと、艱然歩み上つた、上衣の緊い襟へ指を掛けて、彼は、長い頸を二度横へ向けた、そして、溜息して、忍従の身振りで、瘡せた、勞働者らしくは無い手を、前で拱いた。

若者が、段の上で位置を極めつゝあつた數秒の間、四邊には、全くの沈靜があつた。唯だ、悉皆一つの方向へ推し掛ける人民の集團の後方で、溜息や、呻吟や、推す音や、足のばたばたする音が聞えたばかりであつた。

ラストオブチンは、自分が指した場所へ、若者が來るのを待ちながら、顔を擧めて、顔を撫でた。

『若者たち』と、彼は、聲に金屬のやうな音を持たせて、云つて、『ヴェレシチャアギンといふこの惡黨のお蔭で莫斯科が滅びたのだ』

狐皮裏の外套の若者は、忍従の姿勢で、身體の前方で手を一緒に組み合はせ、少し前屈に立つて居た。半分剃られた頭の爲めに恐ろしく醜くされ、絶望の様子を表した彼の寔れた若い顔が、下の方へ向けられて居た。伯爵が前のやうに云ひ出すといふと、彼は徐かに頭を擧げ、伯爵に何か云はうとするのか、それとも、責めて眼だけでも見合せやうとするのか、のやうに、



下から伯爵を見上げた。が、ラストオブチンは彼を見無かつた。若者の耳の後の蒼い筋が、紐のやうに、彼の長い頸の上に現はれて來、不意に彼の顔が真赤になつた。

總ての眼が、彼の上に見据ゑられた。彼は、群集を凝視め、そして、彼が其所の幾個かの顔の面で讀んだ表情の爲めに、望を得たかのやうに、オヅ／＼した、悲しさうな笑顔を爲、それから、再頭を下げて、段の上で足を踏み更へた。

「其奴は、皇帝と國に對する謀叛人だ、其奴は、國を捨て、ナポレオンに隨いたんだ、露西亞中で其奴唯つた一人が露西亞國の名を汚して了まつたんだ、其奴のお蔭で莫斯科が滅びたんだ」と、ラストオブチンは、突慳貪な、單調な聲で、云つた、が、不意に、彼は、同なじ従順な態度で立つて居たヴェレンシチャアギンをジロリと見た。その一瞥が彼を狂亂させたかのやうに、ラストオブチンは、兩腕を突き上げて、群集に向つて殆ど喚くやうな聲になつて――

「其奴をお前たちの宜いやうに處分せえ。私は、其奴をお前たちに引き渡すからな」

人民は、黙つて居た。唯だ相互にだん／＼密集するばかりであつた。相互の重量を堪へて居ること、その汚れた厭な嗅氣を嗅ぐこと、身動きも能き無きこと、そして、漠然とした、解ら無い、恐ろしい何事かを待ち受けて居ることが、堪へ難くなりだした。群集の前面に居て、

自分等の前で行はれて居た事全體を見たり聞いたりして居た人々は、誰も彼も、廣く見張つた、慄然とさせられた眼と、開いた口で、立つて居て、自分たちの背部へ後から推しかゝつて來る重量を踏み堪へやうと、力一杯骨折つて居た。

「其奴を殺れ。……この謀叛人を殺して、露西亞國の名を汚され無いやうにしろ」と、ラストオブチンは、叫んだ。「其奴を斬り倒せ。俺の命令だぞ」。さういふ言辭は聞え無かつたが、ラストオブチンの聲の怒つた調子のみを聞いて、群集は、呻いて、前方へと波立つた、が、再止まつた。

「伯爵……」と、ヴェレンシチャアギンのオド／＼した、が、それでも演劇の白めいた聲が、伯爵の言辭の後の少時の沈靜の裡へ割り込んだ。「伯爵、一つの神が吾々の上に居給ふのですぞ……」と、ヴェレンシチャアギンは、云つて、頭を擧げた、と、再、太い筋が彼の瘡せた頸の上で膨れて、色が彼の顔へ急に出て來て、直ぐ又元の通り靨めた。彼は、彼が云はうとして居た事を云ひ終れ無かつた。

「其奴を斬り倒せ、俺が命ずるんだ……」と、ラストオブチンは、云つて、不意にヴェレンシチャアギンその人と全く同なじやうに白くなつた。



「劔を抜け」と、將校が龍騎兵に怒號つて、自分も劔を抜いた。又前よりも一層烈しい波が、群集の間を亘つて、前列へ達して、其所の者どもを前方へと推し、彼等を推し飛ばして、昇降段の際まで踰越かした。背の高い若者は、顔の石のやうな表情で、空へ舉げた手をその儘動かさずに、ヴェレンシチャアギンの直ぐ傍に立つて居た。「斬れ」と、將校が殆ど叫語で龍騎兵に云つた、兵卒の一人が、顔の筋肉が不意に恐ろしい權幕で動いて、劔の平面でヴェレンシチャアギンの頭を撃つた。

ヴェレンシチャアギンは、「あゝ」といふ短い驚愕の聲を擧げて、何故其様なことが自分に向つてされたのか、解から無かつたかのやうに、不安さうに四邊を見廻した。驚愕と恐怖の同様なやうな呻が群集の裡を走つた。

「おゝ、主よ」と、誰かが悲しさうに云つて居るのが聞えた。

ヴェレンシチャアギンから出た驚愕の叫聲の後で、彼は、苦痛の慄然な叫聲を出した、その叫聲が彼の運の盡きであつた。未だ群集を抑へて居た人情の境界線が最後の力にまで緊張して居て、それが、今倏忽断れた。罪惡が始まつた以上、それが終局まで行くことは何うしても避けられ無いことであつた。非難の慄然な呻は、群集の怒つた、物凄い哮の裡へ溜らされた。船

を粉塵する七番の大波のやうに、その最後の、抵抗し難い波が、群集の後の方で、湧き立ち、真先の列へと過ぎ、彼等の脚を浚らつて、總てのものを捲き込んで了まつた。

犠牲者を撃つた龍騎兵は、重ねて撃つところであつた。ヴェレンシチャアギンは、恐怖の叫聲を揚げて、両手を前へ突き出して、群集の裡へ跳び込んだ。彼が衝き當つた背の高い若者は、ヴェレンシチャアギンの細い頸を両手で掴んで、猛惡な叫聲で、彼と共に、踏み付ける、哮つて居る群集の足の下に倒れた。

或者は、ヴェレンシチャアギンを殴ぐり、手足を折り、或者は、背の高い若者をさう爲た。群集の裡で推し潰された人々や、背の高い若者を救はうと爲る人々の、叫聲は、唯だ群集の狂熱を増すのみであつた。長い間、龍騎兵は、血だらけの、半殺しにされたその工場職工を助け出すことが能き無かつた。それから、一たび始められた事件に終局を告げさしてしまはうと、群集は烈しく急いで種々と骨折つて居たけれども、ヴェレンシチャアギンを殴り、その喉を絞め、その手足を折つた人々も、彼を殺しては了まへ無かつた。群集は、八方からさういふ人々の上へ推し掛り、さういふ人々を真中にして、全體が一人の人のやうになつて右左へと揺すれ、そして、さういふ人々に直ぐ彼を殺させもし無ければ、放させも爲無かつた。



「斧で打てよ、え、？」——「奴等は彼奴を推し潰しちやつたせ」——「謀叛人奴、奴は基督を賣つたんだぞ」——「生きてる」——「未だ生きてやがる」——「盗賊に相應する處分をしてやれ」——「鐵の棒で」——「生きてるか？」

犠牲が、もがが無くならず、その叫聲が、長く引く、調子の揃つた、末期の息使ひになるといふと、やうく其所で、群集は、地面の上の血だらけの屍骸の周圍で、急いで入り代り始めた。誰も彼も、その傍まで行き、爲された事を凝視め、そして、慄然として、驚いて、非難の心持になつて、後へ推し戻るのであつた。

「あ、主よ、人民は猛獸のやうだ、何うして彼の男が生きて居られるものかね」と、いふのが、群集の裡で聞えた。

「それに、未だ若い男だ」——「商人の子に違ひ無いんだ、確に人民……」——「眞實は彼の男ぢやア無いさうぢやア無いか」——「彼の男がさうなんぢやア無い」——「あ、主よ」——「奴等は、今一人の男を殺すところだつた」——「その男は最早死にかゝつてるといふぢやア無いか」——「あ、人民……」——「罪障を恐れ無いものがあらうか、同なじ人民が、今はさういふ風に云ひながら、塵埃と血で汚された蒼い顔の、長い、瘡せた、折れた頸の死骸

を、悲しさうな憐愍で見て居た。

眞正確な警察官が、閣下の廣庭に死骸のあるのは如何にも見苦しいことだと感じて、街路へ死骸を引き摺り出すやうにと、龍騎兵に言ひ付けた。二人の龍騎兵は、折れ挫けた兩脚を捉まへて、死骸を引き摺つて行つた。血で汚れ、塵埃にまみれた、剃つた、死んだ頭が、長い頸の上で右左に轉がりながら、地板を引かれて行つた。群集は死骸から後退さつた。

ヴェレンシチャアギンが倒れ、群集が猛惡な叫喚で、彼の周圍に推し寄せて、波立ちだすといふと、ラストオブチンは、不意に白く爲つた、そして、馬が待つて居た裏口へは行かずに、彼は、階下の部室々々へ通う廊下を、床を見ながら、何處へ自分が行かうとして居るのか又何故自分が行かうと爲て居るのかも解らずに、速い濶歩で歩いて居た。伯爵の顔は白かつた、彼は、下顎の熱病的にビク／＼痙攣するのを抑へることが能き無かつた。

「閣下、此方へ……何處へおいでですか……此方へ」と、後で、震える怖ぢた聲が、云つた。伯爵ラストオブチンは、返答を爲るどころでは無かつた。従順しく向き返つて、教へられた方角へ行つた。裏口には馬車が立つて居た。喚いて居る暴民の遠くの叫聲が、其所へさへ聞え



た。伯爵ラストオブチンは急いで馬車へ入った、そして、町の彼方のソルニキイにある自分の家へやれと、言ひ付けた。馬車がミヤスニイツキイ街へ出て、暴民の叫喚が聞えなくなるといふと、伯爵は、後悔しだした。彼は、自分が下僚等の前でツイ見せて了まつた激昂と恐怖とを、今は不満足に思つた。「民衆は恐ろしいものだ、實に厭な恐ろしいものだ。彼等は狼のやうなもので、肉で静めるより外、何うにも爲方の無いものだ」と、彼は思つた。

「伯爵。一つの神が吾々の上に居給ふのですぞ」。ヴェレンチャアギンの言語が、不意に伯爵の心の裡に出て来た、厭な寒気が背部を走り下つた。が、その感はホンの寸時の間であつた、伯爵ラストオブチンは、自ら嘲けるやうに、微笑んだ。

「俺には他に種々な任務があつたんだ。民衆は慰撫め無ければなら無かつた。他にも多くの犠牲が、公益の爲めには、既に死んだり、又、死につゝあるのだ」と、彼は思つた。

で、彼は、自分が、自分の家族に對して持つ社會的義務や、自分の管理に委ねられた市に對する自分の社會的義務のことや、自分自身のことを思ひ廻らし始めた——彼は、自分をば、一人のフオドル・ヴァシリイエヴィチ・ラストオブチンとしてでは無く（彼は、フオドル・ヴァシリイエヴィチ・ラストオブチンは一身を公益の爲めに犠牲にして居たと、假定して居ただ）

莫斯科總督として、即ち皇帝から全權を委任されて居た官憲の代表者として、自身のことを考へたのであつた。

「若し、俺が、唯のフオドル・ヴァシリイエヴィチであつたのなら、俺の行動は全然別なものであつたらう、けれども、俺は、職務上總督としての生命と、威嚴を失は無いやうにし無ければなら無かつたんだ」

馬車の和らかな弾條の上で軽く揺られながら、亂民の恐ろしい音は最早聞え無くなつて、ラストオブチンは、肉體上には落ち着かせられた、と、肉體上の安堵と何時も同時に起るやうに、彼の智力が、精神上的の慰安を來たす根據を彼に供給した。

ラストオブチンを安心させた考想は、少しも新しいものでは無かつた。世界が存在し、人々が相互に殺し合ひだしてから以來、常に、人が、自分の同胞に對してさういふ罪を犯した場合に、同なじ觀念で自ら慰さめ無いことは、一度も無かつたのだ。その觀念といふのは、公益、即ち假定された他人の公益なのだ。

憤怒に動かされて居無い人には、何ういふものがこの公益なのだか、決して、確に分るものではない、が、殺人の罪を犯した人は、何時でも、何處にその公益なるものが在るのか、瞭乎



と知るのだ。所で、ラストオブチンも、それを知つたのであつた。

自分が今の先刻行つた行爲を熟考することに於て、自分を責めるところでは無く、反つて、彼は、罪人を處刑すると同時に、群集をも満足させ得る、さういふ好機會を巧く使つたことのうち、自己満足をほし、にする根據を見出した。

『ヴェレシチャアギンは、裁判されて、死刑に宣言された奴だ』と、ラストオブチンは思ひ廻らした(けれども、ヴェレシチャアギンは、元老院から重懲役の宣告を受けて居たのみであつた)。「彼奴は、逆徒で、間諜なんだ、俺は、彼奴を罰せずに宥す譯には行か無かつた、で、俺は一個の石で二羽の鳥を打つて了まつたんだ。俺は、群集に贊を與へて、それを慰撫め、それと同時に、悪人を罰したんだ」

郊外の自分の家に達して、伯爵は、自分の家事を處分して居るうちに、落ち着きを全然回復した。

半時間と經ぬうちに、伯爵は、速い馬を驅つて、ソコルニキイ原を横斷つて居たが、最早その時は、過去のことは少しも思はず、それから後に起るべき事件に對する考慮や計畫で、心を占領されて居た。彼は、今、クツウヅフが居るといふのであつたヤウズスキイ橋へと近づいて居た。

て居た。

心の裡で、彼は、自分を欺ましたことに就てクツウヅフを責めやうと思ふ皮肉な、怒つた言語をこしらへつゝあつた。彼は、莫斯科の放棄に續いて必らず來らざるを得無い總ての災害や、露西亞の滅亡(ラストオブチンは、露西亞がさうなつたと思つて居たのだ)に對する責が、彼の年取つた、耄けた頭の上にかゝつて居ることを、その宮中の古狐に感じさせ度かつたのであつた。自分が云はうと思ふことを、豫じめ考へ渡しながら、ラストオブチンは、憤然として、馬車の裡で右左に身體を向け、腹立たしさうに四邊を見廻した。

ソコルニキイ原には人影が無かつた。唯だその一端、慈善院や、顛狂院の側の所に、白い衣服の人々の幾團があつた、それから、同なじやうな人々が怒號つたり、手眞似をしたりして原をさまよつて居た。

そのうちの一人が、伯爵ラストオブチンの馬車の前面を眞直に横斷つて駈けて居た。で、伯爵自身も、馭者も、龍騎兵等も、皆な、さういふ追ひ放された狂人どもを、殊に、自分等の方へ駈けて來つゝあつたその者をば、恐怖と好奇心の漠然とした感で、凝視めて居た。

風にはたゞく寢衣で、長い疥せた脚で踏躑きながら、その狂人は、驀地に駈けながら、ラス



トオブチンに眼を見据ゑて、皺喰れた聲で何か怒號り、彼に向つて止まれといふ合圖を爲た。狂人の陰氣な、大得意の顔は、瘡せて、黄色くつて、髯の疎な房が諸方に生えて居た。眼の黒い、瑪瑙のやうな瞳は、キョト〜と動いて、上の蕃紅花色の白味を見せた。

『待て、止まれ、おい、こら』と、彼は、金切り聲で怒號り、それから、再、力強い身振り、と、聲調で、息をも次がす何か怒號りだした。

彼は、馬車の傍へ来た、そして、それに隨いて駆けた。

『三度彼等は我を殺したり、三度我は又死より蘇がへれり。彼等は我を石にて撃てり、我を磔にせり……我は再び蘇へらん……我は再び蘇へらん……我は再び蘇へらん。我が體を彼等はすたたくに引き裂けり。天國は三度覆へざるべし……三度我はそを覆がへし、而して、三度我は再そを建てん』と、彼の聲がだん〜甲走つて来て、彼は叫んだ。

伯爵ラストオブチンは、不意に白くなつた、丁度、群集がヴェレンシチャアギンに跳び掛かつた時に、伯爵が白くなつたと同なじやうに。彼は顔を背けた。『や……やれ、もつと速く』と、彼は震える聲で駈者に叫んだ。

馬車は馬の全速力で突進した。が、それでも、長いこと、伯爵ラストオブチンは、自分の後

方で、だん〜遠ざかつて行く、狂亂の、絶望の叫聲を聞き、それと同時に、眼の前には、毛皮裏の外套を着た逆徒の驚いた、怖れた、血だらけの顔の外何にも見え無かつた。

その心象は新しいものであつたけれども、ラストオブチンは、今、それが常久に彼の心に刻り付けられたことを感じた。彼は、今、その記憶の血の印は、決して自分を離れはせず、年が経てば経つほど、その恐しい記憶は、ますます残酷に、ますます復讐的に、彼の生涯の終局まで彼の心へ蝕み込むだらうといふことを、感じた。

彼は、『其奴を斷々に引き裂け、で無ければ、お前たちを唯は置かんぞ』と、云つた自分の言辭が今現然と聞えるやうな氣が爲た。

『何だつて、俺は彼様な語を云つたんだらう？。俺は、何うかして、別にさういふ積りも無しに、さう云つたのだ……俺は彼様云は無かつたら宜かつた』と、彼は思つて、『さうだつたら何にも起りは爲無かつたらうに』

彼は、最初の打撃を與へた龍騎兵の、慄然として、それから不意に狂氣のやうになつた顔と、狐皮裏の外套の若者が、彼の方へ注いだ黙つたオド〜した非難の一瞥を見た。

『けれども、自分の爲めに、彼様爲たのでは無い。俺は彼様し無い譯には行か無かつたのだ。』



民衆……逆徒……公益……」と、彼は考へ込んだ。

ヤウザ川の橋は未だ軍隊で一杯であつた。暑い日であつた。クツウゾフは、心配疲れがし、退屈さうで、橋の傍の露架に掛けて、鞭で砂を弄つて居た。と、馬車が音高くガラ／＼と、傍へやつて来た。将官の制服を着、羽毛の着いた帽子を冠つた男が、クツウゾフの傍へやつて来た。その男は、眼を不安さうに方々へ移し、その眼の裡に憤怒と恐怖との間の様子を持つて佛蘭西語でクツウゾフに話しかけた。

それが伯爵ラストオブチンであつた。

彼は、莫斯科は最早無くなり、今残つて居るものは軍隊ばかりであるのだから、其所へ来たのだと、クツウゾフに云つた。

「殿下が、私に仰しやつたやうに、戦はずに莫斯科を捨てるやうなことを爲され無かつたら事態が全く異つて居つたらうと思ひます、斯様なことには爲らんでしたらう」と、彼は云つた。クツウゾフはラストオブチンを見詰めた、そして、自分へ話し掛けられた言辭の意味を解し兼ねたかのやうに、彼は、自分へ話し掛けた人の顔にその時表はれて居た特殊な意味を讀み分けやうと骨折つて居た。

ラストオブチンは、あたふたして、何にも云は無くなつた。クツウゾフは微弱に頭を振つて、依然探ぐるやうな眼で、ラストオブチンの顔を見詰めたが、低聲で呟いた――

「左様だ、私は戦はずには莫斯科を捨てはせん」

さういふ言を云つた時に、クツウゾフは、何か他の事を考へて居たのか、それとも、さういふ言語の無意味であることを知つて居て、態さう云つたのであつたのか、それは分ら無かつたが、伯爵ラストオブチンは、クツウゾフに何の返答も爲無いで、急いで彼の側を離れた。で、實に、不思議なことに、莫斯科總督の、氣位の高い伯爵ラストオブチンが、鞭を拾ひあげて、橋へ行つて、群がつて居る荷馬車に怒號り付けて、それを追つ立て始めた。

(二二六)

午後の四時に、ミュリアの軍隊が、莫斯科へ入つた、先頭には、ウルテンベルヒ驃騎兵が乗つた、その後、非常に大勢の隨員を従へて、ネエブルス王その人が乗つた。

アルバイイの真中、ニコライ・ヤヴレンニイの傍で、ミュリアは止まつて、市の牙城、ル・クレムランの状態に關する前進隊からの情報を待つて居た。



莫斯科の住民の小さい幾個かの群がミュラーの近邊に集まつた。誰も彼も、黄金と羽毛で飾られた、長い髪の大將の不思議な姿を、呆れて、オゾ／＼と見詰めて居た。

「へえ、これが奴等の皇帝なのかな？ 何處にも悪者らしい所は無えね」と、聲々が、こそ／＼と云つて居るのが、聞えた。

通譯官が、見物人の集團へ近づいた。

「帽子だ」——「帽子を脱れよ」と、見物人どもは、小さい群の間で、相互に振り向いて、呟いた。通譯官は、年取つた門番に聲を掛けて、内廊まで未だ餘程あるかと尋いた。門番は、開き慣れ無い波蘭訛を呆れ返つて聞いて居て、通譯官の言語を露西亞語とは思はずに、話し掛けられた事柄が何ういふことなのか一向解ら無いで、他の者どもの陰へ、逃げ込んで了まつた。

ミュラーは通譯官に近寄つて、何處に露西亞の軍隊が居るのか尋けと、言ひ付けた。露西亞人のうちの一人が、その問を解した、そして、五六人の聲が、同時に通譯官に答へだした。前進隊からの佛蘭西の將校がミュラーの傍へ乗り附けて来て、牙城の門は皆な閉まつて居て、何うも伏兵があるらしいと、報告した。

「宜し」と、ミュラーは云つて、隨従の紳士たちに振り向いて、四門の輕砲を前へ進ませて、諸門を砲撃すると、命令した。

砲兵は、ミュラーの後から續いて居た隊列から駆け出て来て、アルパタイを進んだ。ヴォスツヴィゼンカの端に達するといふと、砲兵は止まつて、廣小路で砲列を布いた。五六人の佛蘭西の將校が、少し宛距離を置いて砲を配置することを、監視した、そして、望遠鏡で内廊を見た。夕勤行の鐘が鳴つて居た、その音が佛蘭西人を苦しめた。彼等はそれを戦闘準備の合圖だと思つたのであつた。五六人の歩兵が、クウタフィエフ門口へ駆つて行つた。丸太と板の防障が、門口に横たはつて居た。二發の銃聲が、丁度幾人かの兵を率いた將校が駆け寄つて居た途端に門から響き渡つた。砲の傍に立つて居た將校が、その將校に向けて、何か號令を叫んだ、と、將校と兵卒は駆け戻つた。

尙三發の銃聲が、門から聞こえた。一發は一人の佛蘭西の兵卒の脚を擦過つた、と共に、五六人の聲の異様な叫聲が、防障の彼方で起つた。倏忽、號令でも掛つたかのやうに、佛蘭西の將官や、將校等や、兵卒等の、上機嫌の、落ち着き拂つた表情が、争鬭と、苦痛とを覺悟した頑強な、集中した表情に變はつて了まつた。彼等の總て——元帥から最下級の兵卒に至るまで



——に取つては、その場所は、ヴォスツグイゼンカでも無く、モホオヴァでも無く、クウタフでも無く、ツロイツキイ門でも無かつた、彼等に取つては、其所は、凄惨たる新戦場裡であるかも知れぬ戦場であつたのだ。で、衆皆その戦闘の覺悟を爲した。

門からの叫聲は止んで了まつた。砲は前へ動された。砲兵は、燃えて居る火繩桿を消した。一人の將校が「撃て」と、叫んだ、と、チン／＼いふ錫の二つの唸る音が、相續いて響き渡つた。葡萄弾が、ガラ／＼と、門口の石や、丸太や、板の障屏の上に、落ち、烟の二つの雲が廣小路の上を轉つた。

砲聲の反響が、石の内廓を越えて消え去つてから寸時して、異様な音が佛蘭西人の頭上で聞えた。小鴉の非常な群が、城壁の上へ揚がつて、そして、高い鳴き聲と、何千とも知れぬ羽翼の唸りで、空を飛び廻つた。この音と一緒に、門では、唯つた一つの人間の叫聲が起つた、そして、長い農夫の外套を着た、帽子の無い人の形が、烟の間から現はれた。銃を擧げて、その男は、佛蘭西人を狙つた。「撃て」と、砲兵將校が繰り返した、と、同時に、一つの施條銃の音と、二發の砲聲が聞えた。門は再烟で隠された。

それからは、何にも、防障の彼方では動か無かつた、で、佛蘭西の歩兵が將校等と共に、門から入つて行つた。門口に、三人の負傷者と、四人の死骸が横たはつて居た。長い農夫の外套を着た二人の男は、城壁に沿うて、ズナアメンカの方へと逃げて去つた。

「これを片付けろ」と、將校は云つて、丸木と死骸を指した、で、佛蘭西の兵卒等は、負傷者に止めを刺して、下の屏を越えて死骸を投げ落した。さういふ人々は、向ういふ人間であつたのか、誰も知ら無かつた。「これを片付けろ」彼等に對しては、唯だそれだけ云はれたのみであつた、そして、彼等は腐ら無いやうにと、投げ捨てられたのであつた。尤も、チェールが、彼等の記念にまで雄辯な數行を與へて呉れた——

「これ等の惡漢どもは、神聖なる内廓へ侵入し、武庫の銃を取つて、佛蘭西人に發砲した、(惡むべき奴等よ)。彼等のうち數人は、斬られた、そして、牙城は、彼等の存在より潔められた」

ミュラアは、路が開かれたといふ報告を得た。佛蘭西人は、門を入つた、そして、元老院の廣場で、野營を張り始めた。兵卒等は、椅子を元老院の窓から廣場へと投げ出した、そして、火を造へ始めた。



他の諸隊は、内廊を通り越して、モロセエーカや、ルウビヤンカや、ボクロフカで、野營した。又他の者は、ゾオズツヴィゼンカや、ズナアメンカや、ニコルスカアや、ツヴェルスカアヤに野營を張つた。自分等をもてなして呉れる市人が居無かつたので、佛蘭西人は、何處でも、家の内に宿營は爲無いで、町に張つた野營の内でのやうに、露營したのであつた。襦袢になり、飢えて、疲れ切つて居ながらも、佛蘭西兵は、隊伍整然として、莫斯科へ入つた。苦められ、疲れては居たが、それでも未だ活動的な恐しい軍であつた。

けれども、それは、軍の兵卒等が町ぢうへ別れ／＼になる時まで軍であつたといふに過ぎ無かつたのだ。兵卒等が、人の居無い、金持の家々の附近へ散ばつて了まうや否や、軍は永久に無くなつて了まつた、そして、その代りに、市民でも無く、兵卒でも無く、その中間の何とも云ひやうの無い、所謂掠奪者なる、人間の群集が出来たのであつた。それから五週間経つて、さういふ同様な人々が莫斯科から出て行きだした時分には、彼等は最早軍を成しては居無かつた。彼等は掠奪者の烏合の集團であつて、各自貴いとか、有益だとか認めた物品の一纏めを、擔つて居るか、引き摺つて居るかであつた。

斯ういふ人々の、莫斯科を去る時の、各自の目的は、それまでのやうに兵士として戦はうと

いふのでは無くして、單に各自が手に入れた掠奪物を持つて居やうといふのであつた。猿が、壺の狭い頸の裡へ手をつつ込んで、その裡の胡桃を一握掴み、その掠奪物を何うしても失うまいと、自分の破滅になるまでさへ、握つた拳を開けずに居ると同様なやうに、佛蘭西人は、莫斯科を去ると共に、何うしても破滅に陥るべき譯であつた、何故だといふと、彼等は各自の掠奪物を引摺つて行つて、猿には胡桃を放すことが何うしても能き無いと思はれたと同様なやうに、彼等にも、各自の掠奪物を擲棄することは何うしても能き無いやうに思はれたのであつたからだ。

幾個かの聯隊が、莫斯科の五六の地域へ散ばつてから十分経つと、一人の兵卒も、一人の將校も其所には残つて居無かつた。家々の窓では、軍服を着、ヘツス靴を穿いた人々が、笑ひながら、部屋々々をさまよつて居るのが見えた。穴藏や、貯藏室では、同様なやうな人々が、一生懸命に、飲食物を探して居た、廣庭では、彼等は小舎や、厩の戸を開けたり、破したりして居た、臺所では、彼等は、火を造らへ、裸の腕で、混ぜ、涅ね、焼き、そして、女や小兒等を嚇したり、機嫌を取つたり、笑はしたりして居た。

人は、何處にも、何の店にも、何の家にも、大勢居た、が、軍は最早存在し無かつた。



その日、命令が、佛蘭西の司令官たちから、相次いで出て、兵卒の町へ散らばることを禁じ、住民に對する暴行や掠奪を嚴重に禁じ、そして、その夕方總點呼のあることを布告した。が、さういふ總ての處分に拘らず、軍を成して居た人々は、奢侈や便利なものを非常に潤澤に具へて居た富んだ、人の居無い市ちうへ流れ去つて了まつた。

飢えた獸群が、荒れた野を横斷する時は一緒に居るのだが、富んだ牧場へ達するが最期何うしても、離ればなれになつて、その牧場ちうへ散らばつて了まはざるを得無いのと同じやうに、軍は、何うしても、富んだ町ちうへ散らばつて行くまゝに、水が砂の裡へ吸ひ込まれるやうに、莫斯科には住民が居無かつた、で、兵卒等は、彼等が最初に入つた内廓から八方へ、何うしても流れ去らずには居られ無くつて、諸方へ散らばつて行くまゝに、水が砂の裡へ吸ひ込まれるやうに、莫斯科の裡へ吸ひ込まれて了まつた。

その全財産と共に捨てられて居る商人の家へ入つた騎兵等は、自分等の馬に對する有り餘る程の厩養設備を見つけたのだが、尙それよりも良かりさうに見えた直ぐ隣家へ行つた。五六軒の家を取つて、それへ自分等の名を白墨で書いて置いて、その所有權に就て、他の隊と争論し或は殴り合ひさへした者も多かつた。

兵卒等は、宿舎を定めるや否や、町を見やうと、街を駆け出し、何も彼も捨てゝあると聞いて、高價な物品が無償で持つて來ることの能き場所へと、急いで行つた。將校等は、それを制しにと、その後を追つて行つたが、我にもあらず兵卒等と同じことを爲るやうに誘はれた。カレエツニイ・リアット(馬車屋町)では、馬車の一杯詰まつた儘で、幾個もの店が捨てられて居た、で、將官たちが、自分用の四輪馬車や、二輪馬車を選び取る爲めに、其所へ群れて來た。居残つて居た僅の數の住民は、將校たちを招いて、家へ住まはせて、それで以つて、掠奪を免れやうと思つた。

富は、潤澤であつた、無盡藏のやうに見えた。佛蘭西人に占領されて居た地區から彼方には四方八方何處にも占領せられて居無い探検されて居無い地域があつて、佛蘭西人には、其所では尙一層多くの富が見出され得るやうな氣がした。で、莫斯科は、だん／＼自分の裡へと佛蘭西人を吸ひ込んだ。水が干いた土地の上を流れる時には、水も、干いた土地も共に見え無くなつて、泥になつて了まうのだが、丁度それと同じやうに、飢えた軍が人の居無い富んだ市へ入るといふと、軍も、市の富も、共に死に盡きて了まつて、さういふものの有つた場所へ、火事と掠奪者の組とが、生れ出たのであつた。



佛蘭西人は、莫斯科の焼けたことを、ラストオブチンの擗猛なる愛國心に歸したし、露西亞人は、それを佛蘭西人の蠻行に歸した。實際は、その大火が、誰か一人の人、若くは、人々の集團の所爲だとするやうな、莫斯科の火事の説明は、これまで有りも爲無かつたし、又有り得るものでも無かつたのだ。

莫斯科の焼けたのは、その市が、木で建てられた何の市でもが焼ける筈であつたやうな諸状態の下に、置かれて居た爲めであつて、市に百三十の消防機械があつたか、無かつたかといふやうな問題とは一向關係の無いことなのだ。莫斯科は、その住民が去つたのだから、藁の積層へ幾日も續いて火花を落せば、何うしても焼けざるを得無いのと全く同なしやうに、何うしても焼ける筈であつたのだ。

木造家屋の市では、警察官や、家の持主の住民等が、その市に居る時でも、火事は日常起るのだから、住民が去つてしまつて、それが、烟管を煙らしたり、元老院の廣場で、元老院の椅子で火を造らへたり、彼等自身日に二度づ、炊事をしたりする兵卒で、満ちて居る場合には、その市は焼けることを免がれ得られやうは無いのだ。

平時でも、何の地方でも、軍隊が村で宿營する場合には、何時でも、その地方での火事の數が直ぐに増すものなのだ。其様ならば、木造家屋の市が、棄てられて、外國の兵に占領された場合には、火事の可能は何れだけ増さざるを得無からうか、それは、云ふまでも無いことなのだ。

ラストオブチンの擗猛なる愛國心も、佛蘭西人の猛惡も、問題にはならぬのだ。莫斯科は烟管の爲めに、臺所の火爐の爲めに、燎火の爲めに、そして又、家主の爲るだけの注意を爲無い敵の兵卒の怠慢の爲めに、焼けたのだ。放火の場合があつたとしてさへも（誰も放火を爲すべき理由も無いし、又、放火は、何様な場合でも、面倒な、危険な犯罪であるのだから、放火があつたといふことは、甚だ信じ難いことであるのだが）、放火をば、莫斯科火事の原因と、承認するには決して及ば無いのだ、何故だといへば、その大火の起ることは、放火は無くとも、何うしても避け得られ無い事であつたからなのだ。

佛蘭西人の虚榮心に取つては、咎をラストオブチンの擗猛に歸してしまふのが、心持が好く、又、露西亞人の虚榮心に取つては、惡黨のボナバルトにその罪を歸するか、若くは、後年になつてのやうに、愛國心の強い自國の農民の手に勇者的な行火を置くことが、心持が好かつたけれども、吾々は、火事に向つてはさういふやうな原因は更に無かつたといふ事實を、吾々自身



に對して、隠すことは能き無い、何故だといへば、莫斯科は、何様な村、工場、家でもが、その所有主に棄てられて、他人が其所を一時的の宿と炊事場とに爲た場合と同じやうに、必定焼けるに極まつて居たからであつたのだ。

莫斯科は、確に、その住民の爲めに、焼かれたのだ、が、ぐずつて残つて居た住民に因つて焼かれたのでは無く、その市を棄て去つた住民に因つて焼かれた譯なのだ。

莫斯科は、伯林や、維也納や、その他の市々とは違つて、敵の占領中損害を免れ得無かつた、それは單に、その住民が、鍵とか、歓迎の麵麩や鹽とか、いふやうな物を以つて、佛蘭西人を迎へはせずに、市を放棄して去つたからのみであつた。

## (二十七)

佛蘭西人が莫斯科へ吸ひ込まれて行くことの八方へ廣い圈を爲して廣がつて行く進行は、九月二日の夕方までは、ビエールが居た市の部分へは、達し無かつた。

獨棲と、特異な状態で送つた最後の二日の間、ビエールは、狂氣に近いやうな状態に在つた。絶えず心を悩ます一つの觀念が全く彼の心を占領してしまつた。彼は、何うして、又は、何時、

さうなつたのか自分には分から無かつたのだが、さういふ觀念が、今は全く彼の心を占領してしまつて、彼は、過去の何物をも記憶せず、現在の何物をも理解し得無いまでになつた、彼が見たり聞いたりする有ゆる物は、夢の裡で起つて居るもの、やうな氣が爲た。

ビエールが自分の家を去つたのは、日常生活の諸要求の爲めに自分の周圍に編まれた紛糾つた網から逃れやう爲めばかりであつた、さういふもつれた網は、その時のやうな状態に居た彼に取つては、何うしても解き紓し得無いものであつたのだ。彼は、故人の書籍や書類を整理するといふのに托辭けて、オーシップ・アレクセエヴィチの家へ來て了まつたのであつた。唯だ、彼は、人生の暴風雨を通して安棲する静な家を求めたのに過ぎ無かつた、所で、オーシップ・アレクセエヴィチに對する彼の記憶が、彼の心の裡では、自分が今その裡へ引込まれつゝ、あるやうな氣が爲た動搖の複雑つた旋渦とは全く反對な、静な、嚴肅な、永遠な、一切の考想と、結び付けられて居たのであつた。

彼は、静な隠所が欲しかつた、所が、彼は、それを、オーシップ・アレクセエヴィチの書齋のうちに見出した。で、その書齋の死んだやうな静寂の裡で、死んだ朋友の塵埃だらけの書物卓子に腕を突いて坐つて居るといふと、それまでの數日の諸印象、殊に、ポロディノの戦の印象、



及び、彼が心の裡で『彼の人々』として、指して居た人々の一團の眞實と、率直と、力に較べると、自分自身の小さくあり虚偽であるといふ、心を壓倒してしまふ彼の威の印象が、静な、意義の強い連続で、彼の心眼の前を過ぎるのであつた。

ゲラシムが、彼の瞑想からビエールを呼び覺した時に、ビエールは、フト、必定有る筈であることを彼が知つて居た人民の莫斯科防守の行動に加はらうと、思ひ付いた。で、その目的で彼は、ゲラシムに、農夫の外套と短銃とを手に入れて呉れと頼み、自分は、名を隠してオーシップ・アレクセエヴィチの家に居るといふことを、ゲラシムに話したのであつた。

其所で、獨棲と懶惰の最初の日の間(ビエールは、共済組合の寫本に注意を集中しやうとしたが、無効であつた)、ボナバルトの名と自分の名との關係の密教的意義に就て、以前彼の心に起つた着想が、幾度か、臆氣に彼の心に、起つて來た。が、彼、即ち『露西亞人ベズウホフ』が『戰』の力を無くしてしまふ運命に定まつて居るのだといふ着想は、未だ、腦の裡を唯だフラフラと飛んで、後には何の痕跡をも殘さ無いやうな夢の一つとして、彼の心へ出て來たのみであつた。

人民の莫斯科防守の行動に加はる目的だけで、農夫の外套を買つてから、ロストオフ家の人

人に邂逅ひ、そして、ナタアシャが『貴下は居るんですか?。あゝ、眞個に立派な事だわ』と、云つた時に、縱令莫斯科は敵に取られるにしても、自分は其所に居残つて、自分に向つて豫言されて居た事を爲るのが、立派なことではあるまいかといふ着想が、ビエールの心の裡へ閃き出た。

次の日、身を惜まず、『彼の人々』に何處までも劣ら無いやうにするといふ爲めばかりに、彼は三丘の城壁へ出て行つた。が、莫斯科は守れ無いと確信して歸つて來るといふと、彼は、不意に、これまでは唯だ有り得る事としてのみ思ひ付かれた事柄が、今は最早何うしても爲ら無ければなら無い、避け得られ無い何事かになつて居ることを、感じた。彼は、名を隠して、莫斯科に居残つて、ナポレオンに出會つて、自分の方が殺されるか、ナポレオンを殺して全歐羅巴の不幸を止めてしまふか、一かバチか爲つて見無ければならぬ、と彼は思つた、そして、その全歐羅巴の不幸なるものは、ビエールの意見では、全然ナポレオン一人の罪に歸するものであつたのだ。

ビエールは、獨逸の學生が千八百〇九年に維也納でナポレオンを暗殺しやうと爲た時の詳しい話を悉皆知つて居た、それから、その學生が銃殺されたことも知つて居た。で、彼が、自分



の計畫を實行する爲めには、自分の生命を失う危険を冒さなければならぬといふ事が、尙一層烈しい位にまで、彼を昂奮させた。

同等に強い二つの感が、ビエールをば、抵抗し難く彼の計畫へと引き付けた。第一のものは人民全體の災厄だといふ感の爲めに、犠牲となり、艱苦を忍うといふ欲求であつた、即ち、さういふ感に促がされて、彼は二十五日に、モザアイスクへ行つて、戦の眞の渦中へ身を投じ、それから、今は、自分の慣れた奢侈や便利を捨て、自分の家から逃げ出し、衣服も着換へずに堅い長椅子の上に寝、ゲラシムと同じ食物を食うのであつた。

今一つは、習俗的な、人爲的な、人間らしい有ゆる物、人の大多数が世界に於ける最善と認めて居る有ゆる物に、對する侮蔑の、飽くまでも露西亞人らしい漠然たる感であつた。

ビエールが始めてその奇異な、人を魅する感を覺えたのは、スロボヅスキイ宮でのことであつた、即ち、その時には、彼は、不意に、富や、權勢や、生命や、人間が非常な努力で造り上げて、護つて居る一切の物は、それを悉く投げ捨て得る時の歡喜によつてのみ、何等かの價値を有するのだと、感じたのであつた。

補充義勇兵をして、彼の最後の一錢を飲み盡させたり、酔漢をして、彼は其様なことを爲

れば、自分の持つて居る僅なものを悉皆損し無ければならぬと知つて居ながら、鏡や窓硝子を粉塵させたりするのは、それと同じ感情なのだ、即ち、さういふ感情に由つて、人は、俗に云ふ、馬鹿なことを爲る時には、人生を判断する、唯の人間の制限以外の、もつと高い標準のあることを表はして、自分の個人的力と權力とを證明するやうな風にするのである。

ビエールが、始めてスロボヅスキイ宮でこの感情を経験してから以來すつと、彼は絶えずその感情の影響を受けて居たのだが、その感情が十分な満足を見出したのは、今が最初であつた。その上に、今になつては、ビエールは、自分の計畫の爲めに腰を推されると共に、その方向に向つて彼が最早これ迄に爲つて居た處置の爲めに、その計畫を捨てることは能き無くなつて居た。自分の家からの逃亡、變装、短銃、それから、莫斯科に居残るのだとロストオフ家の人々に云つたこと、などが、若し、彼にして、其様な種々なことを爲た後で、唯だその儘で、他の人民と同じやうに莫斯科を去るのであつたら、全然無意味なことになるのは勿論、尙その上に、愚劣らしい、笑ふべきことに爲つて了まうのであつたのだ（この物笑ひになるといふことが、殊にビエールの厭がることであつた）。

ビエールの肉體の状態が、それが何時もさうである通りに、彼の精神の状態と符合して居た。



食ひ慣れ無い粗食や、彼がさういふ日の間飲んだ露西亞酒や、葡萄酒だの葉巻だの、無いことや、彼の汚れた洗濯し無い襦袢や、夜具の無い短い長椅子の上で送つた眠られ無い二晩などが、一緒になつて、ビエールをば、狂氣に近いやうな苛々した神經過敏の状態に陥いたのであつた。

午後の二時であつた。佛蘭西人は最早莫斯科へ入つて居た。ビエールはそれを知つて居たが、行動にかゝりはせずに、唯だ自分の計畫のことを考へながら、その詳點を悉皆心で繰り返して居た。彼の夢のやうな空想の裡で、ビエールは、決して、打撃を與へる行為そのものを、瞭乎と描きはせず、又、ナポレオンの死ぬる所も、描きは爲無かつた、彼は、唯だ自分の最期や、自分の勇ましい忍耐の勇氣ばかり、非常に現然と考へて、悲しい満足を覺えて居た。

『左様だ、唯つた一人で、俺は、爲り遂げるか、死ぬかなんだ』と、彼は思つた。『左様だ、近寄つて……それから、不意に……短銃か短剣で』と、ビエールは思つた。『いや、其様なことは何うでも宜い。お前を罰するのは、俺では無く、神の御手なんだ。……俺はさう云つて遣る』(ビエールは、自分がナポレオンを殺した時に云はうと思ふ言辭を考へ込んで居た)。『さア、俺を捕へて、俺を處刑しろ』と、ビエールは、一人で呟やき、顔に悲しさうな、然し、斷

平とした表情を以つて、頭を下げた。

ビエールが、部室の真中に立つて、斯ういふ風に考へ込んで居るうちに、書齋の戸が開いた、そして、マカアル・アレクセエヴィイチ——これ迄は何時か臆病であつた——が、全然變つて了まつた態で、戸口に現はれた。

彼の寝衣は前が開いたまゝで、ダラリと下がつて居た。彼の顔は赤くつて、痙攣つて居た。彼は確に酔拂つて居た。ビエールを見るといふと、少時はドキマギしたのであつたが、ビエールの顔にもアタフタした所のあるのを見て取つて、彼は直ぐに大膽になつた、で、瘡せた、踴然する脚で、部室の真中へと、歩み込んだ。

『奴等は、恐ろしいものになつた』と、彼は、皺腹れた、密めかした聲で云つた。『いや、何うしたつて降服せんぞ、何うしたつて……え、貴下?』彼は、止まつた、で、不意に、卓子の上の短銃を見付けて、非常な迅速でそれを掴んで、廊下へ駆け出た。

マカアル・アレクセエヴィイチの後から隨つて來て居たグラシムと門番が、玄關の室で彼を止めた、そして、彼から短銃を取り上げやうと爲た。書齋から出て來たビエールは、半狂人の老人を、厭惡と憐愍とで、見て居た。マカアル・アレクセエヴィイチは、顔を赧めて努力して、



短銃を渡さずに居て、確に何か勇者的な光景を想像して居るらしい態度で、皺唖れ聲で怒號つて居た。

「武器を執れ。奴等を圍め。渡すものか」と、彼は怒號つて居た。

「お渡しなさい、何卒、お渡しなさい。お願ですからね、何卒、お静になすつて。さア、ま、

何卒、貴下、……」と、グラシムは、云ひながら、腕を捉まへて、マカアル・アレクセエヴィイイチを、戸の方へと、徐々と連れて行かうと骨折つて居た。

「誰だ、貴様は？。やア、ナポレオンだ……」と、マカアル・アレクセエヴィイイチは喚いた。

「其様なことを仰しやるもんぢやありませんよ、貴下。お部屋へおいでなすつて、少しお

憩みなさい。さア、短銃をお渡しなさい」

「退がれ、悪黨奴隷奴。俺に觸る勿。こら」と、マカアル・アレクセエヴィイイチは叫んで、短銃を振り廻した。「奴等を打ち倒せ」

「捉まへろよ」と、グラシムが門番に叫びた。

二人は、マカアル・アレクセエヴィイイチの兩腕を捉まへて、戸の方へと引摺つた。

玄關の室には、掴み合ひと、酔拂つた皺唖れ喘の、不體裁な音が満ちた。

唐突に、新たな音、鋭い、女の金切り聲が、門口で聞えた、そして、料理女が玄關の室へ駆け込んで来た。

「彼奴どもが。大變ですよ。……何うでせう、いよく来たのですよ。四人、騎兵ですよ」と、女は叫んだ。

グラシムと門番は、マカアル・アレクセエヴィイイチを放した、と、その後の廊下の静寂の裡

で、彼等は、正面の戸口を叩く五六本の手の音を聞くことができた。

(二十八)

自分の計畫の實行までは、自分の身分を包み、自分が佛蘭西語を知つて居ることを隠して居るのが宜いと、心の裡で決心して居たので、ビエールは、廊下へ半開になつて居る戸の所に立つて、佛蘭西人が入つて来るや否や、直ぐ隠れて了まはうと思つて居た。が、佛蘭西人は入つて来たが、ビエールは、戸の所を離れ無かつた、抵抗し難い好奇心が彼を其所へ引き止めて置いたのだ。

彼等は二人であつた。一人は——様子の好い姿勢の、背の高い、奇麗な將校で、今一人の方



は、確に、兵卒か、その將校の僕からしい、頬の窪んだ、鈍い表情の、屈んだ、瘡せた、日に焼けた男であつた。將校は、杖に絶つて、跛脚を引きながら、先に立つて、入つて来た。二三歩進むといふと、將校は、好い宿舎だと見極めたらしく、止まつて、グルリと振り返り、戸口に立つて居た兵卒等に、馬を繋げと、高い、命令的な聲で、叫んだ。さう爲てから、將校は様子の好い手つきで、空に高く腕を曲げて、口鬚を捻り、そして、手を帽子へ附けた。

「今日は、諸君」と、彼は陽気に云つて微笑みながら、四邊を見廻した。  
誰も何とも返答し無かつた。

「貴下は主人かね？」と、將校は、ゲラシムに向いて、尋いた。

ゲラシムは、ギョツとした不審さうな顔で、將校を見返した。

「宿舎、宿舎、宿だ」と、將校は、云つて、態と身を低くした、機嫌の好い笑顔で、その小さい男を見下した。「佛蘭西人は、善い若者はかりなんだ。仲好く爲やうぢや無いか、老爺さん」と、彼は、言語を續けて、ギョツとして黙つて居るゲラシムの肩を叩いた。「おい、この家ぢやア誰も佛蘭西語の使へる者は居らんのかい？」と、彼は、云ひ足し、見返つて、ビエールと眼を見合せた。ビエールは、戸から引つ込んだ。

將校は、再ゲラシムに振り向いた。彼は、家ぢうを見せろと、ゲラシムに求めた。

「居無い、主人——解りません……貴下、私……」と、ゲラシムは、自分の言語を解るやうに爲やうと思つて、それを逆の順で云つた。

將校は、微笑みながら、ゲラシムの鼻の前で手を振つて、自方の方でもゲラシムの云ふ事が解ら無いことを、知らせて、跛脚を引きながら、ビエールが立つて居た戸の方へと歩いた。ビエールは、引き込んで、將校から自分を隠くさうと爲た、が、その途端に、彼は、手に短銃を携つて、開いて居る臺所の戸から、覗いて居るマカアル・アレクセエーヰイの姿を見付けた。狂人の伶俐さで、彼は、佛蘭西人どもを見、短銃を舉げて、覗つた。

「打つ倒せ」と、醉漢は云つて、引き金を推した。

佛蘭西の將校は、その叫聲の方へ振り返つた、と、同時に、ビエールは、醉漢の方へ跳んで行つた。ビエールが、短銃を掴んで、それを上へ引つ張ると丁度同時に、マカアル・アレクセエーヰイは、到頭引き金を引き得た、と、耳を聳するやうな音が鳴り渡つて、烟の雲が、誰も包んだ。佛蘭西人は蒼くなつて、戸口へと駆け返つた。

佛蘭西語を知つて居ることを隠さうと思つて居たことは忘れて了まつて、ビエールは短銃を



腕ぎ取つて、床へそれを投げ捨て、將校の傍へ駆け寄つて、佛蘭西語で話し掛けた。「負傷は  
しませんか？」と、ビエールは云つた。

「いや、何とも無いやうです」と、將校は、自分の身體に觸つて見て、答へた。「けれども、  
既での事に、やられる所でしたよ」と、彼は云ひ足して、壁士の缺け落ちて居るのを指した。

「彼者は何者です」と、彼は尋いて、ビエールを恐い顔で見た。

「え、實に飛んでも無いことを爲て呉れたものです」と、ビエールは、全く自分の役割を  
忘れて了まつて、口速に云つた。「狂人で、不運な人間で、自分の爲ることの辨別が無いんです」

將校は、マカアル・アレクセエヴィイチのところへ行つて、襟頸を捉まへた。

マカアル・アレクセエヴィイチは、唇を突き出して、睡むつて了まうかのやうに、壁に凭り  
掛つて、頷いた。

「強盗奴、その儘には置かんぞ」と、佛蘭西人は云つて、彼を放した。「吾々は、勝利の後だ  
から、慈悲深くは爲るんだが、謀叛人どもは宥さんぞ」と、將校は、顔に陰鬱な威厳を持ち、  
様子の好い、力強い手眞似をして、云ひ足した。

ビエールは、佛蘭西語で、その酔拂つた白痴に厳しくし無いで呉れと、將校に説いた。佛蘭

西人は、前と同じ陰鬱な態で、黙り込んで、聽いて居たが、そのうちに、不意に、ビエール  
に笑顔で振り向いた。五六秒の間、彼は、黙つて、ビエールを凝視めた。彼の奇麗な顔が、俗  
劇のやうな感情の表情を帯びた、そして、彼は手を差し出した。

「貴下は私の生命を助けてくださった。貴下は佛蘭西人ですね」と、彼は云つた。誰でも佛  
蘭西人である以上は、さういふ推定は、必らず下されるべきものであつた。勇者的行爲なるも  
のは、佛蘭西人のみが爲し得るものであつて、彼、即ち、第十三輕旅團の大尉、モシユ・ラム  
バルの生命を助けることは、確に最も勇者的な行爲であるといふのであつた。

が、この論理が何れ程疑ふべからざるものであり、又、將校が據つた確信が何れ程強い論據  
のあるものであつたにした所で、ビエールは、その問題に於ては、將校の迷を晴らす方が宜い  
と思つた。

「私は露西亞人です」と、彼は、口速に云つた。

「其様なことは他の奴等に云ひ給へ」と、佛蘭西人は云つて、微笑んで、鼻の前で指を振つ  
た。「後で悉皆の物語を聞かしてください」と、彼は云つた。「同國人に逢つたのは實に嬉しいで  
す。所で、彼の男を何う處分したものでせうね？」と、彼は云ひ足して、最早戦友であるかの



やうに、ビエールに相談した。

ビエールは實際は佛蘭西人で無いにしても、佛蘭西人だといふ名——即ち、世界での一番名譽あるもの——を受けた以上は、それを否定する心持は何うしてもあるまい、といふのが、佛蘭西の將校の表情や、聲調が暗示して居るものであつた。

この最後の問題に對しては、ビエールは今一度マカアル・アレクセエヴィイチが何ういふ人間であるか、説明した。將校の來るホンの少時間前に、酔拂つた白痴は、彈の装めたまゝの短銃を持つて逃げて、それを取り上げることが能き無かつたのだと、ビエールは説明した、そして、彼は、マカアル・アレクセエヴィイチの所行を宥して遣つて呉れと、頼んだ。

佛蘭西人は、胸を張つた、そして、氣高い手眞似を爲た。

「貴下のお蔭で私は生命が助かつたんだ。貴下は佛蘭西人だ。その貴下が彼奴を宥せと私に頼んだ。宜しい、貴下の爲めに、彼奴の生命を宥してあげませう。彼の男を釋放させませう」と、佛蘭西の將校は、口速に、力強く、云つて、ビエール——その將校の生命を助けたので佛蘭西人といふ位に進められた——の腕を撃つて、彼と一緒に部屋へと歩いて居た。

廣庭に居た兵卒等は、銃聲を聞いて、何か有つたか尋いて、罪人を罰することを引き請けや

うと、玄關へと來て居た、が、將校は荒々しく彼等を止めた。

「用があれば、呼ぶ」と、彼は云つた。で、兵卒等は引き退つた。其様なことの有つて居たうちに、臺所へ入つて行つて居た從卒が、將校のところへ入つて來た。

「大尉、臺所に奴等の肉汁と、豚の脚があります」と、彼は云つた。「持つて參りませうか」「うん、それから、葡萄酒を」と、大尉は云つた。

(二十九)

佛蘭西の將校が、部屋へビエールを引張り込んだ時に、ビエールは、今一度自分が佛蘭西人で無いことを、大尉に向つて念を押すのが自分の義務だと思つた、そして、引つ込まうと思つた、が、佛蘭西の將校は、それを承知し無かつた。將校が、餘り禮儀正しく、叮嚀で、上機嫌で、そして、生命を助けられたことに對して、ビエールを心底から難有がつて居るのであつたから、ビエールは斷り兼ねて、二人が入つた最初の部屋の、食堂で一緒に坐つた。

自分は佛蘭西人では無いと、ビエールが言ひ張るのに對して、大尉は、其様な心持の好い名を何うすれば受け無い人があるのか、全く不思議だと思ふらしい態度で、肩を揺つて、若し、ビ



エールが何處までも露西亞人を通さうといふのなら、それはそれにして置かう、然し、それに拘らず、自分は、自分の生命を護つて呉れたことに對する感謝の情で、ビエールに對しては、永久に友人となつたやうに思ふのだと云つた。

若し、この男が、他の人々の感情を洞察するやうな能力を少しでも持つて居て、ビエールの情緒を少しでも覺るやうであつたのであつたら、ビエールは、この男の傍を去つたのであつたらう。けれども、この男の、自分に關係の無い事には、何事にも氣が付か無い陽氣な様子が、ビエールを打ち勝つて了まつた。

「佛蘭西人でも、身を窶した露西亞の公爵でも」と、佛蘭西人は、云つて、ビエールの汚れて居るが良い襯衣と、ビエールが篋めて居る指輪を見た、「貴下のお蔭で、生命が助かつた、だから、貴下と朋友に爲り度いんです。佛蘭西人といふものは、侮辱も忘れ無いと共に、決して恩も忘れません。何うです、朋友になりませんか。私の云ふのは、唯だこれだけです」

將校の聲、顔の表情、身振りには、非常な卒直な、人の好ささうな所と、好い育ち柄（佛蘭西の意味での）が、見えて居たので、ビエールは、我知らず、彼の笑顔に笑顔で答へて、彼の差し出した手を撃つた位であつた。

「第十三輕旅團の大尉ラムバル、九月七日の戦闘で勳章を授けられた」と、彼は、満足の抑へ難い微笑を口鬚の蔭に漂はせて、自分を紹介した。「私が、彼の狂人の彈を身體の裡に持つて野戦病院に居ることにならずに、こゝで斯う愉快なお話を爲る貴下のお名を聞かしてくださいますか」

ビエールは、名を云ひ度く無いことを答へ、そして、さう爲ることの能き無い理由を話して居るうちに、何か名を造らへやうと思つて、顔を赤くして、何か云はうと爲た、が、佛蘭西人は、急いで、ビエールを遮ぎつた。

「いや、宜しい」と、彼は云つた。「貴下の方の理由は解りました、貴下は將校ですね……參謀でせう。貴下は、吾々に對して、武器を執つたんですね。其様な事は私の構うことでは無い。私は、貴下のお蔭で、生命が助かりました。私はそれだけで最早澤山です。私は、貴下の云ふなりにあります。貴下は貴族ですね？」と、彼は、尋くやうな聲調で、云ひ足した。

ビエールは、頭を下げた。

「貴下の洗禮名を、何卒？。唯だ、それだけで宜いんです。モシユウ・ビエール、ですか？。結構。私の知り度いのは唯だそれだけです」



豚肉、オムレット、沸茶器、露西亞酒、それから、佛蘭西人たちが露西亞の穴藏から取つて来て居た葡萄酒が、持つて来られるといふと、ラムバルは、ビエールに、晝食を一緒に喫べて呉れと、云つた、で、直ぐに、健康な、空腹な男の急ぎと、健啖で、彼自身食物にかゝり始めて、強い齒で力強く噛み、そして、絶えず唇をバクバク云はせて、「上等だ。旨い」と、大きい聲で云つた。

彼の顔は赤くなつて、汗ばんだ。ビエールも腹が空居たので、喜んで食事を共にした。

從卒のモオレルは、熱い湯の入つた壺を持つて来て、その中へ赤葡萄酒を一壇入れて暖めた。彼は、又、味はう爲めに、臺所から果酒を一壇持つて来た。

この飲料は、最早佛蘭西人たちには知れて居た、そして、綽名を附けられて居た。彼等はそれを「リモナード・ド・コシオン」と呼んだ、そして、モオレルは、彼が臺所で見付けたその「豚のレモン水」を賞めた。

が、大尉は、莫斯科を横断つて居るうちに手に入れた葡萄酒があるのであつたから、果酒はモオレルに遣つて、自分の方はポルドオの壘を攻撃した。彼は、壘を口拭布で纏んで、自分にも、ビエールにも、酒を注いだ。酒と、飢の満足とが、大尉を尙一層陽氣に爲た、で、彼は、

食事中、絶間無しに饒舌り捲つた。

「左様、私の親愛なモシニウ・ビエール、私は、彼の狂人から私を助けてくださったので、貴下の爲めに、良い感謝の蠟燭を上無ければならんです。ねえ、私は、私の身體に最早幾個も弾が中つて居ます。一、これは、ウァグラムの奴です」(彼は、自分の横腹を指した)、二、これは、スモレンスクの奴です」(彼は、頬部の疵痕を指した)、「歩け無いこの脚は、ね、七日のラ・モスコワの大戦で、斯う爲つたんです。やア、實に、壯觀だつたねえ。貴下見て置けば宜かつたねえ、それは、銃砲火の大洪水だつたですよ。貴下の軍は、吾々に随分苦戦させた、貴下たちは、彼を誇るが宜い、實際、で、實際、私は、今咳嗽に罹つて居るのだが、それでも、彼を今一遍やるといふのなら、何時でも直ぐ爲るね。彼を見無かつた人は氣の毒だね」

「私は彼の時居ましたよ」と、ビエールは、云つた。

「眞實ですか」と、佛蘭西人は、言語を續けた。「いや、それは結構です。だが、貴下がたは立派な敵だ。大堡壘は善く守られたですね、實に、で、貴下がたは、又、彼所に對して、吾々をして、重い損害を拂はしましたね。私は、私が此所に坐つて居るやうに實際、彼所へ三度達しましたよ。三度とも砲まで行つて、三度とも、板紙人形のやうに追ひ退けられたんです。い



や、實に壯觀でしたね、モシユウ・ビエール。貴下の方の選抜兵は見事でした、實に、私は、彼等が六度續いて、密集團になつて、觀兵式の時のやうに、進撃するのを見ました。立派な奴等だ。さういふことを善く知つて居る吾々のネエブルス王は、豪いぞ、と叫びました。あ、あ、吾々自身と同一じやうな兵」と、彼は、少時黙つて居てから、云つた。「では、結構です、結構です、モシユウ・ビエール。戦には猛勇で……女には、優しい」彼は、笑顔で胸を爲た「其所が、佛蘭西人です、モシユウ・ビエール、え、？」

大尉が、餘まり卒直で、機嫌好く陽氣で、毒が無く、自ら満足して居たので、ビエールは、彼を機嫌好く見ながら、殆ど胸を爲返した。「優しい」といふ言辭が、大尉をして、莫斯科の事態を考へ込ませるやうに、爲たらしかつた。

「時に、何うです、女は悉皆莫斯科を出て去つて了まつたといふのは眞實ですかね？。奇異なことも有るものですか。何が恐いのだらう？」

「露西亞人が巴里へ入る場合でしたら、佛蘭西の婦人たちは、巴里を去らずに居るでせうかね？」と、ビエールは云つた。

「は……は……は……」と、佛蘭西人は、快活な、心からの笑で噴飯して、ビエールの肩を

叩いた。「いや、これは宜い、これは」と、彼は言語を續けた。「巴里……だが、巴里は……」  
「巴里は世界の都だ」と、ビエールは云つて、佛蘭西人の云ひ切らぬ言辭を、補なつて了まつた。

大尉は、ビエールを見た。彼は、談話の途中でバツタリ止まつて、笑つて居る親しげな眼で、凝乎と見詰めるのが癖であつた。

「いや、若し貴下が露西亞人では無いと私に云は無かつたのであつたら、私は、貴下は必定巴里人だと云つて、賭を爲るのでしたらう。貴下の様子には、彼の何とも口では云ひやうの無い或る物がある……」で、斯ういふ世辭を云つて、彼は再びビエールを黙り込んで凝視めた。

「私は巴里に居ました。何年も彼地で暮しましたよ」と、ビエールは云つた。

「それは、誰が見ても、直ぐ、さうと分ります。巴里。巴里を見たことの無い者は野蠻人だ……。巴里人は二リイグ離れて見ても、直ぐさうと分ります。巴里——それは、タルマです、ラ・デュウシエノアです、ポティエーです、ラ・ソルボンヌです、廣小路です。自分の言辭の終結が少し漸墜だと覺つたので、彼は急いで斯う云ひ足した、「世界に巴里は唯だ一つあるのみだ……貴下は巴里に居たことがある、それで居て、依然露西亞人で居る。いや、それが爲めに、



貴下を別に安く見る譯では決してありませんがね」

唯つた一人で、陰鬱な考慮ばかりして、引籠つて幾日も送つた後なので、ビエールは、飲んだ酒の爲めもあつて、この機嫌の好い、無邪氣な男と談話をするのを愉快に思は無い譯には行か無かつた。

「再、貴下の方の婦人の話になりますかね、悉皆奇麗なんださうですね。佛蘭西軍が莫斯科へ来たのに、曠原の裡へ自分等自身を埋めて了まうなんて、何といふ愚劣なことせうな。實に好い機會を奴等は失つたものです。貴下がたの農夫は別です、けれども、貴下がた、文明人たちは、それよりもつと伶俐で無きやアならん筈ぢやありませんか。吾々は、維也納、伯林、マドリイド、ネエブルス、羅馬、ウアルソウ——といふやうな、世界の有ゆる都——を取りました。吾々は恐れられて居ますが、然し、又愛されて居ます。吾々を知つて置く價値は十分にあります。で、それから、皇帝……」と、彼は云はうと爲だした、が、ビエールは彼を遮ぎつた。

「皇帝」と、ビエールは繰り返した、と、彼の顔は、不意に悲しさうな、當惑した表情を帯びた。「皇帝が何うなんでしょうか？」

「皇帝ですか？ 陛下は、寛大で、慈悲で、正義で、秩序で、天才——それが皇帝なんです。さう貴下に話すのは、私、即ち、このラムバルなんです。私は八年前には、陛下の敵でした。私の父は、脱國の伯爵でした。が、陛下は私に打ち勝ちました、彼の人は、陛下は私を確乎捉まへて了まつたです。私は、陛下が、偉大と光榮を以つて、佛蘭西を蓋つて居るその光景に抵抗することが能き無いのでした。私が、陛下の爲やうと思つて居たことを、解するといふと陛下が吾々の爲めに月桂冠の寢床を用意して呉れつゝあることを見るといふと、私は獨り心の裡で、「あれこそ、王者だ」と、云つたんです。で、私は私自身を全然陛下に捧げて了まひました。え、確に、陛下は、過ぎ去つた世紀并に來るべき世紀の、最も偉大な人なんです」

「で、皇帝は莫斯科に居られるんですか？」と、ビエールは、躊躇しながら、オゾ／＼した顔容で、尋いた。

佛蘭西人は、ビエールのオゾ／＼した顔を凝視めて、莞爾とした。

「いや、陛下は明日入城される」と、彼は、云つた、そして、自分の談話を續けた。

二人の談話は、門の所で叫ぶ五六人の聲の爲めに、中斷された、と、モオレルが入つて來て、幾人かのウルテンベルヒ驃騎兵がやつて來て、大尉の馬が宿めてあつた庭へ、彼等の馬を宿め



やうとして居るといふことを、大尉に話した。驃騎兵等には、此方の云ふ事が解ら無いので、主にそれが爲めに話が付かぬといふのであつた。

大尉は、驃騎兵の司令の曹長を自分の前へ伴つて來させて、荒々しい聲で、何の聯隊の者だか、司令將校は何といふ人なのか、何ういふ理由で、彼は、既に他人が占有して居る宿舎を占有しやうとするやうなことを爲るのか、尋いた。

その獨逸人は——佛蘭西語を極く——少許しか知つて居無かつたのだが——最初の二つの間には何うやら斯うやら答へ得た、最後の問——それは彼には何ういふ事だか解ら無かつたのだが——に對する答として、彼は、獨逸語の間へ、一寸々々滅茶苦茶の佛蘭西語を挟んで、自分は、聯隊の給養係なのだ、長官から、その街路の有らゆる家を占領しろといふ命令を受けたのだと、説明した。

獨逸語を知つて居たビエールは、獨逸人の言辭を大尉に通辯し、大尉の返答を又獨逸人へ通譯した。自分に對して云はれた事柄が解るといふと、獨逸人は納得して、部下を伴つて去つて了まつた。

大尉は、入口へ出て行つて、何か大聲で命令を與へた。

彼が部室へ歸つて來た時には、ビエールは、頬杖を突いて、前に坐つて居た所に坐つて居た。彼の顔は、苦悶の様子を表はして居た。彼は、實際その時は苦悶して居たのだ。大尉が出て行つて了まつて、ビエール一人になるや否や、彼は不意に我に返つた、そして、自分のその時居た位地に氣が付いた。その刹那に、彼を苦悶させたのは、莫斯科の取られたことでも無く、又これ等の勝利者どもが、莫斯科で思の儘に舉動つて、彼に對しても主人顔な行爲を爲て居ること——ビエールは、それを甚く情け無く思つたには違ひ無いが——でも無かつた。彼は、自分の不甲斐無いことを知覺したので、苦悶したのであつた。彼の飲んだ酒の二三杯と、この人の好い男と無駄話を爲たこと、が、彼がその數日來考へて暮らして居た、そして、彼の計畫を實行するには切要であつた集中した陰鬱のその氣分を消散させて了まつたのだ。

短銃も、短劍も、農夫の外套もチャンと用意されて居た、そして、ナポレオンは、その翌日入城するのであつた。ビエールは、「惡黨」を殺すことの立派なことであり、有益なことであるのを、感ずることは前と少しも異ら無かつた、が、彼は、今は最早其様なことを爲ることは能きさうも無いと、感じた。

彼は、自分の不甲斐無きの知覺を脱しやうと掩いた、が、彼は、自分がその知覺に打勝つこ



との能き無いことや、復讐、虐殺、犠牲といふやうな彼がこれ迄持つて居たさまざまの觀念の暗惨たる一連續が、其後始めて人間に一人逢ふや否や、塵のやうに吹き飛ばされて了まつたことを、漠然とながら、感じた。

大尉は、少し跛脚を引きながら、何か歌を口笛吹きながら、部室へ来た。

ビエールはそれまでは面白かつた佛蘭西人のお饒舌が、今は、急に甚く厭に思はれた。それから、彼が歌を口笛吹くのや、彼の歩容や、口髭を捻る彼の手態などが、悉く今はビエールには、無禮なやうに思はれた。

「俺は、直ぐ去つて了まはう、此奴に最早一言だつて言語を掛けるものか」と、ビエールは思った。彼はさう思ひながらも、依然同なじ場所に坐つて居た。不甲斐無い或る奇異な感情が、彼をその場所へ釘付けにした、彼は、起つて、去き度いと思つた、が、さうすることができなかつた。

大尉の方は、その反對で、非常に好い元氣であつた。彼は、二三度、部室の裡で、行つたり來たりして、歩いた。彼の眼は、キラ／＼し、そして、何か可笑しいことを一人で笑つて居るかのやうに、口髭がビク／＼した。

「實に面白い男だ、彼様いふウルテムブルヒ兵の大佐は」と、彼は、全く唐突に云つた、「彼奴は獨逸人だ、けれども、此上も無い善い人間だ。だが、獨逸人だ」

彼は、ビエールに真向つて坐つた。

「それはさうと、君は獨逸語を知つて居ますか？」

ビエールは、黙つて、大尉を見た。

「獨逸語では「安身所」を何と云ひますね？」

「「安身所」と、ビエールは繰り返した。「安身所」は獨逸語では「ウンテルクンフト」です」

「え、何です？」と、大尉は、急いで、疑はしさうに尋ねた。

「ウンテルクンフト」と、ビエールは繰り返した。

「オンテルコフ」と、大尉は、云つて、そして、數秒の間、笑つて居る眼でビエールを見て居た。「獨逸人といふ奴は、寛棒な愚物ばかりだね、さうちやア無いか、モシユウ・ビエール？」と、彼は、言辭を結んだ。

「うん、この莫斯科赤葡萄酒を今一壺、え、？。モオレル、今一壺暖めろよ」と、大尉は、



勢好く大聲で云つた。

モオレルは、幾本かの蠟燭と、酒一壺とを、持つて來た。大尉は、蠟燭の燈火でビエールを見た、と、その伴侶の苦悶して居る顔に驚いたらしかつた。顔に心底からの氣の毒さと同情を表はして、ラムバルは、ビエールに近寄つた、そして、彼の上へ身體を曲げた。

「え、悲しい時だね」と、彼は、云つて、ビエールの手に觸つた。一僕の爲たことが何か君の氣に觸りでも爲たかね。いや、實際、君は、僕に對して氣を悪く爲て居るんぢやア無いかね？」と、彼は尋ねた。「今の事態の爲めなんだらうね？」

ビエールは、何とも返答爲無かつた、けれども、彼は、親し氣に佛蘭西人の眼を見た。この同情の表情が佛蘭西人には心持が好かつた。

「全く實際の所、君が僕の命の親であることは別としても。僕は君が好きだ。何か僕に能きることなら、何でも云つて呉れ給へ。僕に何でも頼んで呉れ給へ。これは死生の誓言なんだ。僕の手と眞心で、僕は斯う云ふんだ」と、彼は、云つて、自分の胸を叩いた。

「有り難う」と、ビエールは云つた。大尉は、彼が「安息所」といふ獨逸語を教はつた時にビエールを見詰めたと同じやうに、ビエールを見詰めて居たが、不意に、大尉の顔が晴々と

して來た。

「いや、さういふ譯なら、相互の友情に對して、盃を舉げませう」と、彼は、勢好く叫んで酒を二杯注いだ。

ビエールは、盃を取つた、そして、飲み干した。ラムバルも、自分の盃を干し、今一度ビエールの手を握り締め、それから、沈んだ悲哀の姿勢で、卓子に肘を凭せた。

「左様、君、運命の氣紛れといふものは實に不思議なものだね」と、彼は云ひ始めた。「僕が吾々が始終ボナバルトと呼んで居たその人に事へる軍人となり、その部下の龍騎兵の大尉にならうなどとは誰も思ひ掛け無かつたでせう。けれども、僕は、彼と共に、今この莫斯科に居るでは無いかね。え、君」と、彼は、長い物語を爲やうと思ふ人の悲しさうな、調子の揃つた聲で、續けて、「僕の姓は、佛蘭西では最も舊家の中なんだ」

で、佛蘭西人の、呑氣な、辛直な、包み隠さぬ風で、大尉は、自分の祖先等の歴史、幼時、少年時、壯年時、それから、自分の總ての親類、自分の運、及び、家内の事情を、ビエールに話した。「僕の哀れな母」のことが、勿論、この物語の主な部分を成して居た。

「だが、其様なことは悉皆人生の嵌込物に過ぎ無いんだ、眞正の物は、戀だね。戀だよ。え



え、モシユ・ビエール」と、彼は、熱して來だして、云つた。「今一杯」

ビエールは再自分の杯を干し、自分で、三杯目を注いだ。

「あゝ、女ども。女ども」で、大尉は、濕つた眼でビエールを見詰めながら、戀や、女性に對する冒險の物語を、ビエールに爲始めた。さういふ事柄は極く多かつた、それは、その將校の氣取つた奇麗な顔や、彼が女のことを話す一生懸命の熱心さから判断すれば、誰にも直ぐ左様であつたらうと信じ得られることであつた。

ラムバルが爲つたといふ戀の物語は悉く、その特殊な汚なさ——その裡に、佛蘭西人は戀の無雙の快味と詩的美を見出すのだ——で、特質づけられて居たに拘らず、大尉の話方が、自分は、戀の有ゆる旨味を味はひ且知り盡したものだといふ全く心の底からの確信を以つてしたものであつたし、又、自分が關係した女等に關する話し方も如何にも面白いものであつたので、ビエールは好奇心を以つて、聞き入つたのであつた。

その佛蘭西人が、それ程好いて居た「戀」なるものは、ビエールが嘗て自分の妻に向つて感じた彼の低い、單純な種類の戀でも無ければ、彼がナターシャに向つて感じた——彼自身で誇張した——ロオマンティックな戀でも無かつたらしかつた。さういふ兩種の戀は、孰も、ラムバルは共に卑しんで居た——一つの方は、「車力の戀」で、今一つの方は、「痴漢の戀」だといふのであつた。その佛蘭西人が好きであつた「戀」といふのは、女に對する不自然な關係と、感情に主な快味を貸すやうな奇怪なさま々な事情の結合とで、主に成り立つて居るものであつたのだ。

で、大尉は、三十五歳の非常に美しい侯爵夫人と、その非常に美しい侯爵夫人の娘の十七歳の可愛らしい無邪氣な兒とへ、同時に戀を爲た面白い物語を爲た。母親と娘との間の寛恕の競争は、母親が自分の方を犠牲にして、自分の戀人に對して娘を結婚させやうと云ひ出すに終つたのだが、その事が、その記憶は最早餘程前のことであつたに拘らず、今でも大尉を深く感動させたのであつた。

それから、彼は、夫が、戀人の役割を勤め、彼——戀人——の方が夫の役割を勤めたといふ挿話や、獨逸——其所では、ウンテルクンフトがアジールの意味であり、其所では、夫どもは甘藍肉汁を喰ひ、若い娘等が、餘まり亞麻色の髪であり過ぎる——その獨逸の憶ひ出の中から、五つ六つの滑稽な挿話を爲た。

最後の挿話は、波蘭でのことであつて、それは大尉の記憶では未だ新しいのであつた。彼は



速い手真似と、輝いた顔でそれを話した。その物語は斯ういふのであつた。彼は或る波蘭人の生命を助けた——生命を助けたといふ挿話が、大尉の物語の裡には何時も出て来るのであつたが——所で、その波蘭人は、自分の美しい妻、心は巴里人の女を、大尉に託して置いて、自分は佛蘭西軍に加はつて了まつた。大尉は幸福であつた、その美しい波蘭婦人は、彼と駈落を爲やうとしたが、大尉は、寛大の衝動に動かされて、夫に妻を返して、斯う云つた、「我輩は、君の生命を助けた、そして、又、君の面目を助ける」

さういふ言辭を繰り返しながら、大尉は、眼を拭いて、人を感動させるこの追憶と共に、彼を襲つた弱い心を振り落して了まはうとするかのやうに、身體を振つた。

夜遅く、そして、酒に酔つた時には、誰にでも往々ある通りに、ビエールは、大尉の物語に聞き入つて居て、大尉が自分に話した事柄を感せず聞いて、それを理解して居ながら、それと同時に、自分の方では、何うかいふ拍子で、自分の想像の裡へ出て来た自分一個の種々な追憶の連續を追ひ辿つて居た。大尉のさういふ種々な戀物語を聞いて居るうちに、ナタアシャに對する自分の戀愛が不意に心の裡へ出て来た、で、自分の想像の裡でその戀愛の繪全體を繰返して、彼は、心の裡で、それをラムバルの物語と較べた。

戀愛と義務の間の煩悶の物語を聞いて居るうち、ビエールは、自分の戀愛の目的である女と、スハアレフ塔の所で、遭會つた時のことを、詳しく、眼の前に、見た。

その邂逅は、その當時には、それ程の印象をビエールに與へ無かつた、彼は、その後唯一度そのことを思つたのみであつた。が、今は、その邂逅の裡には、なかく意義のある、小説的な何物かがあるやうに、ビエールには、思はれたのだ。

「ビエール・キリリイチ、此所へおいでなさい、私が直ぐ發見けたのよ」

ビエールには、今その女の言辭が聞えた、その女の眼や、笑顔や、旅行帽子や、その下から覗き出して居た捲髪が、見えた……で、彼は、總てさういふ物のうちに、人の心を感動させる何物かがあるのを、感じた。

美しい波蘭婦人の物語を終るといふと、大尉は、ビエールに振り向いて、ビエールにも、戀愛の爲めの犠牲や、正當な良人に對する羨みの、同なじやうな經驗があるか何うか、尋ねた。

ビエールは、この問の爲めに喚び覺まされて、頭を擧げて、そして、自分の心の裡の考想を、口へ出し度い抵抗し難い衝動を感じた。彼は、自分は、戀愛をば、大尉とは少し異つた風に、觀て居ることを説明し始めた。彼は、生涯唯つた一人の女を愛し、今も依然それを愛して居る



のだが、その女は決して自分のものになることは無いのだ、と云つた。

『さア、それから』と、大尉が云つた。

其所で、ビエールは、自分は、極く若い時からその女を愛して居たのだが、女の方は餘り若過ぎるし、自分の方は、自分の名さへ無い庶子であつたので、その女のことを思ふことさへ爲し得無かつた、所が、自分には名も出来、富も出来るといふと、自分は、その女を餘りに多く愛し過ぎ、世界ちうの何物よりも以上に、自分自身よりも自然以上にさへ、その女を置いたが爲めに、その女のことを思ふことさへ爲し得無かつたといふことを、説明した。

その點まで来ると、ビエールは、大尉に、彼には、さういふことが解るか、何うか、尋いた。

大尉は、それが解らうが解るまいが、右に左、後を話して貰ひ度いのだといふ意味の手真似を爲た。

『ブラトニツク戀愛だ、空な戀……』と、大尉は口の裡で云つた。

飲んだ酒か、卒直になり度い衝動か、その相手の男は、ビエールの物語に關係して居る人々のうちの誰をも知ら無いし又決してそれを知るやうになることも無からうといふ考慮か、若しくは、さういふこと總體かが、ビエールの舌を緩めたのであつた。口籠り勝な唇と、濕つた

眼の裡に持つた極く遠方を見て居るやうな様子とで、彼は、自分の結婚や、自分の極く信友に對するナタアシャの戀愛や、ナタアシャの裏切りや、その女とのビエール自身の單純な總ての關係などの、物語を悉皆爲て了まつた。彼は、又、ラムバルの間に應じて、彼が最初隠して居た事——即ち、彼の社會上の地位——を、大尉に話し、それから、到頭自分の名さへ明して了まつた。

ビエールの物語の裡で、何よりも深く大尉に印象を與へたことは、ビエールが、非常な金持であつて、莫斯科に宮殿のやうな大邸宅を二軒持つて居るのに、其様な一切の物を棄て、了まひながら、依然莫斯科を去らずに、名と地位を隠して、市に止まつて居るといふ事實であつた。夜遅くなつて、二人は、一緒に街へ出て行つた、夜は暖で、晴れて居た。左方には、莫斯科で起つた最初の火事——ベツロオフカでの——の明りがあつた。

右方には、若い半月が、空に高く立つて居、それから、天のそれと反對の方には、ビエールの心の裡では、彼の戀愛と連關して居た輝いた彗星が懸つて居た。

廣場の門の所には、ゲラシムと、料理女と、二人の佛蘭西人とが、立つて居た。ビエールには、彼等の笑聲や、相互に解らずに居る物語の聲が、聞えるのであつた。



彼等は、町で燃えて居る火事の明りを見て居た。

高い、星の多い空や、月や、彗星や、火事の明りを、見詰めて、ビエールは、愉快な、そして、優しい感情の戦慄を覺えた。

「何も彼も實に良い。誰でも、この上に、何の欲しいものがあるものか」と、彼は思った。で、自分の計畫のことを憶ひ起すといふと、不意に、頭がクラ／＼としたやうな氣が爲た、甚く眼が廻るやうな氣が爲たので、倒れ無いやうにと、彼は柵へ凭たれたのであつた。

新しい朋友に別を告げずに、ビエールは、たど／＼しい歩調で門の所を去つた、そして、部屋へ歸つて行つて、長椅子の上に横になつて、直ぐ就眠つて了まつた。

## (三十)

慌だしく莫斯科から遠ざかりつゝあつた住民等と、退却して行く軍隊とは、九月の二日に起つた最初の火事の明りをば、種々の道路から、種々な感情で、凝視めた。

ロストオフ家の一行は、その夜は、莫斯科から二十露里のミイティシチイで、宿つた。九月の一日には、彼等の發足が随分遅かつたし、道路が荷馬車や軍隊の爲めに塞がつて居たし、又

種々な遺れ物があつて、家僕等を取りに歸らしたりしたことなどで、その最初の晩は、莫斯科から五露里の所で止まることに爲たのであつた。

その次の朝、彼等は、遅く起きた、そして、又其所でも種々と隙取つて、艱然ボルシイヤ・ミイティシチイに達したのであつた。十時になつて、ロストオフ一家及びそれと共に旅して居た負傷兵等は、大きい村の家の廣庭や、小舎で、その夜を送る場所を得た。家僕等、ロストオフ家の馭者等、及び、負傷將校の從卒等は、各自の主人等がその夜を送り得るやうな始末を終つてから、自分等も、晩食を爲、馬どもに秣料を遣つて、それから、小舎の入口へ出て來た。

その直ぐ隣りの小舎には、手首を碎かれたラエーフスキイの副官が臥て居た、烈しい疼痛が、間斷無しに彼を呻した、で、さういふ呻吟は、秋の夜の暗の裡では慄然とするやうな聲であつた。最初の晩には、この副官が、ロストオフ家の人々が眠て居た小舎と同一な廣庭の中の建物の裡で、宿まつた。伯爵夫人は、その呻吟の爲めに、徹宵まんじりともせられ無かつたと云つた、で、ミイティシチイでは、伯爵夫人は、その負傷者から離れた所に居度い爲めばかりに、少し居心の好く無い方の小舎で、宿まつた。



家僕等の一人が、入口に立つて居る高い馬車の上の、暗い夜の空で、火の今一つの小さい明りを見付けた。さういふ一つの明りは、餘程前から見えて居た、で、誰も、それは、マモオノフの哥薩克兵が火を放ったマリイヤ・ミイティシチイだと思つて居た。

『おい、朋輩、又火事だせ』と、その男が云つた。衆皆その火光の方を見た。

『いや、マモオノフの哥薩克兵がマリイヤ・ミイティシチイへ火を放ったといふ話だせ』『いや、何うして、彼所がミイティシチイなのかい、もつとズツと遠方だ』『おい、何うも莫斯科らしいせ』

人々のうちの二人が、入口を離れて、馬車へ行つて、踏み段に跪んだ。『もつと左方だ。いや、ミイティシチイは彼所だ、彼は全然方角が違つてるよ』今五六人が最初の群に加はつた。

『やア、燃え広がるせ』と、一人が云つた。『彼は、莫斯科が火事だね、朋友、スシチオオフスキイか、ロゴシスキイかなんだ』

誰もこの言辭には答へ無かつた。そして、暫時の間、人々は衆皆、遠方で明つて居るこの新たな火事の煙を、黙つて凝視めて居た。

伯爵の侍僕（カムメルディエネル）と云はれて居た老人のダニイロ・テレンティイチが、群の所へ来た、そして、ミシカを呼んだ。

『何を喋べつてるのだ？……伯爵が呼びなされるかも知れ無えのに、誰も居無えちやア不可ねえ、行つて、衣服の始末を爲ろよ』

『いや、水を汲みに一寸と出て来たばかりなんです』と、ミシカが云つた。

『で、何うです、ダニイロ・テレンティイチ？。彼は、莫斯科が火事だらうかね？』と、従僕の一人が云つた。

ダニイロ・テレンティイチは、何とも返答し無かつた、で、暫時、再誰も黙つて居た。

火光は、だんく廣がつた、そして、だんく遠方へと、燃えて行くのであつた。

『大變だな……この風と、この乾きぢやア……』と、再一人の聲が云つた。

『おい、随分廣がるせ。やア、あれ、小鶉どもが見えらア。主よ、我等罪あるものを憐ませ給へ』

『直き消しちまはアな、心配する勿よ』

『誰が消すんだ？』と、その時までは何一言も云は無かつたダニイロ・テレンティイチの聲が



叫んだ。彼の聲は、静で、落着いて居た。「莫斯科だ、朋輩たち」と、彼は云つた。「莫斯科なんだ吾々の母の、白い市の……」彼の聲は斷れた、そして、彼は、不意に老年の歎歎で泣き出した。で、彼等が見て居たその火光の意義を解する爲めには、唯だそれだけを、誰もが待つて居たのであつたかのやうに、見えた。嘆息や、低い聲の祈禱や、年取つた侍僕の歎歎が聞えた。

## (三十一)

侍僕は、屋内へ入ると、伯爵に、莫斯科が焼けて居ることを知らせた。

伯爵は、室内衣を着て、見に出て行つた。未だ衣服を脱がなかつたソオニヤと、マダム・シ。ツスも、一緒に出て行つた。ナタアシャと、伯爵夫人ばかり、室内に残された。ベエティヤは、最早家族と一緒に居無かつた、彼は、ツロイツァへ行進して居る彼の聯隊に加はつて、前方へ行つて了まつて居たのだ。

伯爵夫人は、莫斯科が火事だと聞くと、泣いた。ナタアシャは、蒼い顔で、見詰めた眼で、聖畫の下の腰架に坐つて居た、其所へは、ナタアシャは、その部屋へ入るや否や、横になつた切りであつたのだ、で、ナタアシャは、父親の言辭を耳に入れ無かつた。ナタアシャは、小舎

を三つ距て、居るのに未だ聞えて来る副官の絶間の無い呻吟を聞いて居た。

「あ、眞個に大變だわ」と、ソオニヤが、寒くなつて、怖けて、廣庭から入つて来て、叫んだ。「必定、莫斯科ちうが焼けてるんだわ、眞個に大變な火事なのよ。ナタアシャ、ご覽なさいよ、最早此所の窓からも見えるんですよ」と、ソオニヤは、確に、ナタアシャの氣を紛らさうとして居るらしい態で、云つた。

が、ナタアシャは、自分に向つて云はれた事が解から無かつたかのやうに、ソオニヤを見詰めて、それから、再煖爐の隅へ眼を見据ゑた。

ソオニヤは、その朝、何うした理由であつたのか、公爵アンドレエーが負傷して、ロストオフ家の一行と一緒に居ることを、ナタアシャに話すが宜いと思つて、それを話したので、伯爵夫人は非常に驚き且怒つたのだが、それ以來、ナタアシャは、始終斯様な化石したやうな様子で居たのであつた。伯爵夫人のソオニヤに對する怒り方は、これまで滅多に無かつた程のものであつた。ソオニヤは、泣いて、勘辨を請うた、で、今は、自分の過失を償はうと爲て居るかのやうに、始終ナタアシャの傍に隨つて居たのであつた。

「ご覽なさい、ナタアシャ、眞個に恐しいやうに焼けてるわよ」と、ソオニヤは、云つた。



「何が焼けてるといふの？」と、ナタアシャが尋いた。「あ、左様、莫斯科」

で、ソオニヤを逃れる爲めと、又、構ひ付け無いで、先方の心持を悪くするやうなことを爲まいといふのとで、ナタアシャは、窓の方へ頭を向けたのだが、その見た様子は確に何も見無かつた風であつた、で、再前と同じ姿勢で坐つた。

「でも、見えたでせう？」

「え、眞個に見えてよ」と、ナタアシャは、何卒構は無いで置いて呉れと懇願する聲で、云つた。

莫斯科も、その火事も、ナタアシャには、更に何の興味も無い事件であつたことが、伯爵夫人にも、ソオニヤにも、直ぐ解るのであつた。

伯爵は、再間隔壁の陰へ入つて、横になつた。伯爵夫人は、ナタアシャの所へ行つて、娘が病氣の時に自分が何時も爲るやうに、ナタアシャの頭に手を置いて、熱があるか知らうとするかのやうに、唇を娘の額に着けた、そして、接吻した。

「寒いのかい？ 甚く震えてるぢやア無いかね。最早お寝なさい」と、伯爵夫人が云つた。

「寝るの？。え、宜ごさんす、寝ますわ。私今直ぐ寝ることよ」と、ナタアシャは云つた。

その朝、ナタアシャは、公爵アンドレエーが、重傷で、自分たちと一緒に旅を爲て居ると、話されるといふと、最初は、何ういふ風で、何故、何處へ、彼は行きつゝあるのか、危篤な程重傷なのか、自分は逢つて宜いだらうか、といふやうな種々なことを尋いた。が、逢つては不可い、彼の負傷はなかく重傷だが、生命には別状は無いと、云ひ聞かされるといふと、ナタアシャは、確にさう云はれた通りには信じて居無かつた様子であつたが、自分が何ういふことを云はうとも、返答は依然同なじことしきやされ無いのだと、見て取つて、尋くことを止めて、一切何にも云は無くなつた。途中は始終、眼を見張つて、馬車の隅で、動かずに坐つて居た、ナタアシャのさういふ眼付は、伯爵夫人が善く知つて居て、非常に怖がつて居るものであつたのだ。で、ナタアシャは、今小舎の裡でも、それと同じ様子で坐つて居たのであつた。ナタアシャは、何か計畫を案じて居た、ナタアシャは、心の裡で、或る決心を爲つゝあるのか、或は、最早今は、その決心を爲て了まつて居たのか、であつた——伯爵夫人は、それだけは知つて居た、が、その決心が何ういふものであるのか、それは知れ無かつた、で、それが、伯爵夫人には、不安であり、心配になつたのであつた。

「ナタアシャ、衣服をお脱ぎ、お前さん、私の寢床へお入りよ」



伯爵夫人ばかりに、寢臺の上で寢床が造へられて居た。マダム・シヨツスと二人の娘たちとは床の上の乾草の上に眠るのであつた。

「いゝえ、母上様、私床の此所の所で寝るわよ」と、ナタアシヤは、苛々して云つた。で、窓へ行つて、それを開けた。副官の呻吟は、開いた窓からは、尙善く聞えた。ナタアシヤは濕つた夜の空氣へ頭を出した、そして、伯爵夫人には、ナタアシヤの細そりした頭が、窓框の所で、歎歎で震え、波を打つて居るのが見えた。ナタアシヤは、公爵アンドレーが呻いて居るのでは無いと知つて居た。ナタアシヤは、公爵アンドレーが、自分たちが居た小舎と續いた同じ建物の裡に居ることや、彼が、廊下を越した直ぐ彼方の小舎に居ることを、知つて居た、が、それでも、その恐しい、少しも止間の無い呻吟が、ナタアシヤを歎歎させたのであつた。伯爵夫人は、ソオニヤと一寸と眼を見合した。

「お眠みよ、お前、私の寢床へおいで、ね、善い娘だから」と、伯爵夫人は、ナタアシヤの肩に軽く手を觸らせて云つた。「さ、お眠み」

「え、……私直ぐ寝ますよ、直ぐ」と、ナタアシヤは、云つて、急いで衣服を脱ぎ、下袴の紐を断つた。衣服を下へ落とし、寢衣を着て、床に出来て居た寢床の上で、足を身體の下へ折

込んで、坐り、短かい、綺麗な髪を肩へ投げ掛けて、それを編み始めた。

ナタアシヤの細い、長い、慣れた指が、速く且巧妙に、髪を分け、編み、そして、結つた。

さう爲て居るうちも、ナタアシヤの頭は、何時もの通りに右左に向いたが、神経的に見張つた眼は、同なじ見据ゑた凝視で、前の方を真直に見て居た。

夜の髪を済ますといふと、ナタアシヤは、戸に一番近い乾草の上に布いてあつた夜具の裡へ、静に沈み込んだ。

「ナタアシヤ、中央へお眠みなさいよ」と、ソオニヤが云つた。

「私此所にするわよ」と、ナタアシヤは云つた。「貴女もお眠みなさいよ」と、ナタアシヤは、

五月蠅さうに、云つた。で、顔を枕へ埋めた。

伯爵夫人も、マダム・シヨツスも、ソオニヤも、急いで衣服を脱いで、寢床へ入つた。聖晝の前の夜燈ばかりが、部屋に残つて居た燈火であつた。が、戸外は、マリイヤ・ミイティンチイの火事が、二露里四方の田舎を照らして居、街の彼方側の——マモノフの哥薩克兵が押し込んだ酒肆では、農夫等の大聲の騒ぎが聞え、それから、副官の呻吟が、絶間無く、有らゆる音の裡を通つて、聞えて來た。



長い間、ナタアシヤは、室内及び戸外から聞えて来る音を聞いて居た、そして、身動きも爲無かつた。最初には、母親の祈禱と、溜息、その身體の下で寢床がギイといふ音、聞き慣れたマダム・シヨツスのヒユウ〜いふ鼾聲、それから、ソオニヤの和かな呼吸を聞いた。と、伯爵夫人がナタアシヤを呼んだ。ナタアシヤは返答し無かつた。

「睡たでせう、母上様」と、ソオニヤが答へた。

伯爵夫人は、少時黙つて居てから、再何か云つた、が、此度は誰も返答し無かつた。

直きその後、ナタアシヤは、母親の調子の揃つた呼吸の音を聞いた。ナタアシヤは、蒲團の下から外へ出て居た自分の小さい足が、敷物の無い床の上で、凍えるやうな氣が爲たけれども身動きを爲無かつた。

蟋蟀が、世間ぢうへ勝利を布告するとも云ひさうに、間隙で鳴いて居た。雄雞が、遠方で鳴き、今一つが、直ぐ附近で答へた。酒肆での大聲も静まつて了まつた、が、副官の呻吟は、依然同なじやうに續いて居た。ナタアシヤは起き上つた。

「ソオニヤ。睡たの？。母上様」と、ナタアシヤは叫びた。

誰からも返答が無かつた。

徐々と、靜に、ナタアシヤは起つて、十字を切り、そして、徐々と、細そりした、撓やかな、裸の足で、埃だらけの冷たい床へと、歩み出た。床板がギイ〜いつた。速い足で、ナタアシヤは、仔猫のやうに、二三歩駆けた、そして、冷たい戸の手柄を捉まへた。

何物かが、重い、調子の揃つた打撃で、小舎の有ゆる壁を叩いて居るやうな氣が爲た、それは、戦慄と、戀愛と、恐怖とで、攪き亂されたナタアシヤ自身の心臓の鼓動であつた。

ナタアシヤは、戸を開け、敷居を越し、外の通路の濕つた、冷たい、地板へと、歩み出た。四邊の冷たさが、ナタアシヤを心持好くした。裸の足が、睡て居る男に觸つた、ナタアシヤはそれを跨いで、公爵アンドレエーが臥て居る小舎の戸を開けた。

その小舎の裡は、暗かつた。大きい心が烟つて居る獸脂蠟燭が、彼方の隅の、何物かが横になつて居る寢臺の傍の、腰架の上に、立つて居た。

その朝、公爵アンドレエーの負傷と、彼が其所に居ること、を、聞いてから以來、ナタアシヤは、絶えず、何うしても彼に逢はうと決心して居たのであつた。何故さう爲無ければならぬのか、それは解ら無かつたのだが、然し、ナタアシヤは、その對面は自分には苦痛だらうといふことを知つて居た、で、それが爲めに、その對面が避け得られ無いに違ひ無いことが、尙一



層確に思はせられたのであつた。

終日ちうを、ナタアシヤは、夜になれば彼に逢うといふ希望の裡に、送つて居た。が、今その刹那が来て見るといふと、何様な物を見るだらうかといふ恐怖がナタアシヤを襲つた。何様なに變つて居るだらうか？。彼が何様なに爲つて居るだらうか？。彼は、副官の彼の絶間の無い呻吟のやうであるのか？。左様だ、彼は、全然彼と同一なものだ。ナタアシヤの想像の裡では、公爵アンドレーエーは、苦痛の彼の呻吟を具體化したものであつたのだ。

隅にある何とも極められ無い妙な物を見、被褥の下で立てられて居た膝を肩だと間違へて、ナタアシヤは、其所に非常に恐しい身體を想像した、そして、慄えあがつて、立ち止まつた。が、抵抗することの能き無い力が、ナタアシヤを前へと引き付けた。ナタアシヤは、用心深い一步を運んだ、それから、今一步出た、と、何時の間にか荷物の散けて居る部室の中央へ来て居た。聖畫の下の腰架の上に、今一人の男が臥て居た（これは、ティモオフィンであつた）、そして床の上に、今二人の人が居た（醫者に、侍僕であつた）。

侍僕は起き直つて、何か口の裡で云つた。ティモオフィンは、脚の傷が痛むので、睡て居無かつた、で、白い寢衣の、短か上衣の、夜帽の、娘の不思議な姿を、眼をクワツツと見張つて、見

詰めた。

侍僕の眠むさうな、怖た、「何だ？。何の用だ？」と、いふ言辭は、ナタアシヤを、隅に臥て居る人の姿の方へ、急がせるのみであつた。その姿が、何れ程人間らしく無い恐しいものであるにしても、ナタアシヤは、何うしても彼を見無ければなら無いのだ。ナタアシヤは、侍僕の傍を通り越した、烟つて居る蠟燭が燃えあがつた、と、ナタアシヤは、何時も彼を見た時と少しも異ら無い公爵アンドレーエーが、被褥の上へ兩腕を突き出して、臥て居るのを、瞭乎と見た。彼は、全く何時もの通りであつた、が、顔のポツと赤くなつて居る所や、ナタアシヤを熱烈に見詰める彼の輝いた眼や、殊に、夜の襯衣の折れた襟の上に出て居る和かな、小兒のやうな頸が、非常にあどけ無い、小兒のやうな様子——ナタアシヤは、これまで一度も、彼に於て見たことの無い様子——を彼に與へて居た。

ナタアシヤは、彼の所へ駆け寄つた、そして、速い、撓やかな、若い舉作で、跪づいた。公爵アンドレーエーは微笑んで、ナタアシヤに手をさし出した。

(三十一)



公爵アンドレーエーが、ボロディノオの戦場の救護所へ来てから、七日経つた。その間始終彼は、殆ど引續いて人事不省の状態にあつたのだ。熱と、傷められた内臓の炎が、その負傷者に附いて居た醫者の説では、何うしても彼を死なせるものだといふのであつた。が、七日目になると彼は、麵麩一片に茶の少許を、旨がつて食つた、そして、醫者は、熱が下つて行くのを認め、公爵アンドレーエーは、朝になると、知覺を回復した。莫斯科を出た後の最初の晩はなかく暖であつた、で、公爵アンドレーエーは、馬車の裡で、その夜を送つた。が、ミイティシチイでは、その負傷者は、馬車から降して、茶を呉れと、自分から頼んだ。小舎へ移す爲めに起された苦痛が、公爵アンドレーエーをして、聲高く唸らせ、再知覺を失はせた。陣用寢臺に臥かされるといふと、彼は、長い間、眼を閉いで、動かすに居た。そのうちに、眼を開けて、「茶は何うした？」と、低い聲で呟いた。

醫者は、公爵がさういふ風に日常生活の小さいことの知覺があるのに、驚かされた。彼は脈を見た、と、脈が餘程確に爲つて居るのを知つて、驚くと共に不満を感じた。醫者が不満であつたのは、彼が、公爵アンドレーエーは何うしても死ぬのだと感じ、で、若し今死な無いとすれば、少し後になつてもつと苦しい死やうを爲るのだと感じて居た爲めであつたのだ。公爵ア

ンドレーエーと一緒に、聯隊の少佐、ティモオフィンが来た、それは、ボロディノオの同じ戦で脚に負傷したので、莫斯科で公爵と一緒に居たのだ。醫者に、公爵の侍僕に、馭者に、從卒二人が、公爵アンドレーエー等の世話を爲て居たのだ。

茶が公爵アンドレーエーに與へられた。彼は、何事かを理解し、憶ひ出さうと爲て居るとも云ひさうに、彼の正面の戸を神経的な眼付で見ながら、茶を一生懸命に飲んだ。

『最早澤山。ティモオフィンが居るかね？』と、彼は尋いた。

ティモオフィンは、腰架の上を彼の方へと、徐々と這つて行つた。

『此所に居ります、閣下』

『君の負傷は何うだね？』

『私のですか？。何でも無いです。だが、貴下は如何ですか？』

公爵アンドレーエーは、何か知ら憶ひ出さうと爲て居るかのやうに、再考へ込んだ。

『此所では、書籍は手に入るまいか？』と、彼は云つた。

『何ういふ書籍ですか？』

『聖書。僕は持つて居無い』



「醫師は、聖書を手に入れてやらうと約束した、そして、容態を公爵に尋き始めた。公爵アンドレーは、醫師の間には、不承々々らしかつたが、チャンとした返答を爲た、そして、今の儘では、心持が悪いし、苦しいのだから、何か下へ物を入れて、身體を支へるやうに爲て貰ひ度いと云つた。醫師と、侍僕は、公爵の上に被けてあつた軍用外套を取り去り、傷から来る、腐つて行く肉の厭な臭氣に、顔を擧めながら、恐ろしい傷所を見始めた。醫師は、何か甚く心配して居るらしかつた、彼は、少し位置を變へる爲めに、公爵を反側させたので、公爵は、反側らされた爲めの疼痛で、再唸つて、再知覺を失つて了まつた。彼は、譚語を云ひ出して、聖書を持つて来て、身體の下へ支つて呉れと、云ひ續けた。

「それがお前たちに何れ程のことなんだい？」と、彼は云ひ續けた。「僕は持つて居無いんだ、何處で手に入れて、寸時でも宜いから、身體の下へ入れて呉れ」と、彼は慇懃な聲で云つた。醫師は、手を洗ひにと室外へ出て行つた。

「あゝ、何うも良心といふものが少しも無いな、貴様たちは、眞個に」と、醫師は、彼の手へ水を注ぎ居た侍僕に向つて、云つて居た。「二分でも、貴様たちに氣を付け無いで居るといや、彼の疼痛を能く堪へて居ることだなア」

「チャンと下へ入れたと思ふんですが、全くのところ」と、侍僕が云つた。

公爵アンドレーは、始めて、何處に自分が居るのか、自分の身に何ういふことが起りつゝあるのかが、瞭然と解つた、そして、自分は負傷して居て、馬車がマイティシチイで止まつた時に何ういふ風であつたのか、それから、小舎へ入れて呉れと頼んだことを、憶ひ出した。苦痛の爲めに再知覺を失つてから、小舎の裡で、茶を飲んで居るうちに、今一度十分に自己に歸つた。で、其所で、再、自分の身に起つたことを悉皆記憶の裡で繰返すといふと、彼の心の裡の一番現然とした繪は、彼が、救護所へ行つて、彼が厭だと思つて居た男の苦痛を見た途端に、それ等の新たな考想が幸福の非常な希望を伴つて、自分の心に起つて來た刹那の有様であつた。

で、それ等の考想が——今は、漠然として居て、形を成さぬものではあつたが——再彼の心を占領した。彼は、彼が今何か新たな幸福を持つたことを、憶ひ起し、そして、その幸福が幾分か聖書と關係のあることを、憶ひ起した。それで、彼は、聖書が欲しいと云ひ出したのであつた。

が、彼の傷所の下に支物も無しに、彼が置かれて居た位地や、その位地の新たな變更が、再彼



の考想を混乱させて了まつた、で、彼が、三たび目に、再自己に歸つたのは、夜の全く静になつてからであつた。

彼の周囲では、誰も睡て居た。蟋蟀が一匹廊下の彼方で鳴いて居た、誰かが街路で、怒號つたり、謠つたりして居た、油虫が、卓子や、聖畫や、壁の上を、ガサ／＼歩いて居た、大きい蠅が、彼の枕の上や、彼の側に畑つて居る大きい心で立つて居る獸脂蠟燭の周囲を、飛んで居た。

公爵アンドレーエーの心は、常平の状態では無かつた。健康な人は、同時にさまざまの非常な數を、考へ、感じ、憶ひ起すのだが、彼は、それと共に、さういふ物の裡から、思想や現象の一連續を擇んで、それに自分の全注意を集中させるだけの力と心能を持つて居る。

健康な人は、最も深い考慮に沈んで居る最中でも、入つて来る人があれば、考慮を中途で止めて、挨拶を一語して、その上で、再考慮に戻るのだ。

公爵アンドレーエーの心は、斯ういふ點では、常平の状態では無かつた。彼の心の全能力が、常より自然明瞭であり、敏活であつた、が、それ等の能力は、彼の意志とは全く離れて働いて居た。最も相異なつた觀念や、心象が、同時に彼の心を占領して居た。

時々、彼の脳は、健康な時には決して能き無かつたやうな力や、明かさや、深さで、不意に働き出すのであつた。が、不意に、考想の連續がその最中で中斷されて、意外な心象が其の代りに出て來、そして、後へ戻る力が無いのであつた。

「左様だ、人間から取り去ることの能き無い新しい幸福が俺に啓らせられたんだ」と、彼は、静な、薄暗い小舎の内に臥て居て、思つて、神經的に廣く見張つた眼で、自分の前方を見詰めて居た。「物質的の力の達することの能き無いところに有る幸福なんだ、人間に與へられる物質的な、外的な勢力の及ば無いところに有る幸福なんだ。靈だけの幸福なんだ、愛の幸福なんだ。それを感ずることは、誰にでも能き得ることなんだ、けれども、それを知つて、さう定めることは、神で無ければ能き無いことなんだ。だが、神は何うしてこの法則を定め給うたのか？。何故「子」なのか？……」

と、不意に、その考想の續きは斷れて了まつた、そして、公爵アンドレーエーは（譫妄の裡でか、現實でか、分ら無かつたが）「ビティ……ビティ……ビティ……ビティ……それから、『イ……ティ……ティ……』それから又、『イビティ……ビティ……ビティ……』、再『イティ……ティ』と、絶えず問の揃つた和かな叫び聲のやうなものを、聞いた。



で、この咄くやうな音楽の音と共に、公爵アンドレーエは、極く細い針か、割り木の不思議な、透徹つたやうな建物が、彼の顔、而も、その真中央の上へ立ち上がつて来るかのやうな、心持が爲た。彼は、さう爲るのは自分に取つては餘程苦しかったけれども、この立ち上がつて来る建物が粉々に崩れ無いやうにと、一生懸命自分の身體の均衡を失はずに居なければなら無いのだといふ、氣持が爲た、が、それでも、その建物は、粉々に崩れ出して居るかと思ふうちに、やがて、再、咄くやうな音楽の調子の宜い間拍子に合つて、徐々と立ち上つて来るのであつた。

「あ、延びて行く、延びて行く、廣がつて行く、延びて行く」と、公爵アンドレーエは、一人で云つた。

咄聲を聞き、その針の建物が延び廣がり立ち上つて来るのを感じて居ると同時に、公爵アンドレーエは、チラ／＼、蠟燭の周囲の赤い光明の圈を見、油虫のガサ／＼する音や、枕や顔へボンと飛び付く蠅の唸を聞いた。で、蠅が顔へ觸る度毎に、それが彼に螫すやうな感覺を與へたが、それでも、彼の驚いたことには、立ち上つて居る建物の真中央の所で、彼の顔を、蠅が打つたのだけでも、建物は碎けて了まは無かつた。

が、總て斯ういふ事の外に、別に重要な一つの物があつた、それは、戸の所にある白い物であつた、それは、獅身人頭怪の塑像であつて、それも又甚く彼の心を押し付けたのであつた。

「卓子の上の俺の襯衣かも知れ無い」と、公爵アンドレーエは思つて、「彼物は俺の脚だ、彼物は戸だ、が、何故、この緊張と、動きと、それから、ビティ……ビティ……ビティ、それから、ビティ……ティ、それから又、ビティ……ビティ……ビティがあるんだ……最早澤山だ、止める、靜になつて呉れ、何卒」と、公爵アンドレーエは、誰かに、懶氣に頼んだ。と、不意に、考想と感情が、再非常な明さと力とで、表面へと、浮んで來た。

「左様だ、愛なんだ（彼は再全くの明さで思つた）、が、それは、何物かに對するとか、何物かを得やうとか、何物かの故とかいふやうな、愛では無くつて、俺が生れてから始めて感じたその愛なんだ、俺は、死に掛つて居る時に、自分の敵を見ただが、それでも、俺はその男を愛したんだ。俺は、何の目的になるものをも要し無い愛、靈の眞の要素であるところの愛、その感情を知つたんだ。それから、俺は、今は、その幸福な感情も知つて居るんだ。隣人を愛すること、敵を愛すること。有らゆる物を愛すること——神をば、神の有ゆる顯明に於て、愛すること。誰でも、自分に取つて懐かしい何人かをば、人間的な愛を以て愛することが能さる



のだ、が、敵を愛するのは、唯だ神的な愛で愛することが能きのみなんだ。それが俺が彼の男を愛して居るのだと感じた時に、彼様な非常な歡喜を感じた理由なんだ。彼の男は何うなつたらうか？。彼の男は生きて居るだらうか？……」

「人間的な愛で愛する場合には、人は、愛から憎悪に變ることがある、けれども、神的な愛は何うしても變ら無いものだ。如何なる物でも、死でさへも、如何なる物でも、さういふ愛をば破すことは能き無いんだ。それは、靈の天性そのものなんだ。所で、俺は何れ程多くの人々をこれまでに憎んだことだつたらうな。そして、總ての人々の中で、彼の女より以上に俺が愛しもし、憎みもしたものは一人も無い」

で、彼は、現然とナタアシャの姿を自分の心の裡に描いたが、それは、彼が過去に於てその女を描いたやうには無く、彼に取つて喜悅であつたその女の人を魅するやうな良い所を添へて、描いたのであつた、そこに始めて、彼は、ナタアシャの靈を心の裡で描いたのであつた。と共に、彼はナタアシャの、感情や、苦惱や、耻や、後悔が解かつた。

今、始めて、彼は、自分がその女を捨て、了まつたことの殘酷さの全體を感じた、その女との離別の殘酷さの全體を認めた。

「今一度彼女に逢うことが能きたら……一遍、彼の眼を見て、云ふ……」

ビティ……ビティ……ビティ……イティ……ティ、イビティ……ビティ——ブン、蠅が突き當つた……で、彼の注意が、乍ら、現實と譫妄の他の世界へ移つたが、其所では、餘程奇異な事が起つて居る所であつた。其所では、建物、依然立ち上つて、崩れすにあり、何物かが依然延び廣がつて居、蠟燭がその周圍に赤い圈を持つて、依然燃えて居、同なじ襦袢の獅身人頭怪が依然戸の傍に横はつて居た。が、さういふ物總ての外に、何物かがキイと鳴つた、新しい空氣フツと一吹き込んだ、そして、新しい獅身人頭怪が、戸の前に立つて、現はれた。で、その獅身人頭怪は、公爵アンドレーエーが今の先刻夢みて居たナタアシャその女の白い顔と輝いた眼を持つて居た。

「あ、この止つこの無い譫妄には飽きくするなア」と、公爵アンドレーエーは思つて、彼の視界からその顔を追ひ拂はうと骨折つた。が、その顔は、現實の顔で彼の前に立つて居た、そして、だんく近寄つて來るのであつた。

公爵アンドレーエーは、考想ばかりの世界へ歸つて行かうと爲た、が、それは能き無くて、彼は、譫妄の世界へと引き戻された。和かな吠聲が、その調子の整つた呬語を續け、何物かが



彼を押し付け、立ち上つて来、そして、不思議な顔が、彼の前に立つた。

公爵アンドレーは、有らゆる力を呼び集めて、彼の五感を回復しやうと爲た、彼は少許身動きを爲た、と、耳は鳴り、眼の前が茫乎とした、そして、水の底へ沈む人のやうに、知覺を失つて了まつた。

彼が、自己に歸ると、ナタアシャ——即ち、彼が、今自分に示されたその新しい純潔な、神的な愛で愛し度いと、世界ぢうの誰よりも一番望んで居た眞個の生きたナタアシャその女——が彼の前に跪づいて居た。

彼は、それが眞個の生きたナタアシャであることを知つた、が、驚かすに、靜に喜んだ。

ナタアシャは、跪づいて、恐れて、動かすに、(動き得無かつたのだ)、公爵アンドレーを見詰めて、歎歎を堪へて居た。ナタアシャの顔は白くつて、堅くなつて居た。唯だ、その下の部分に震慄のやうなものがあつたばかりであつた。

公爵アンドレーは、安堵の溜息を爲て、微笑んで、手をさし出した。

「貴女でしたか？」と、彼は云つた。「何といふ幸福でせう」

速い然し用意深い舉動で、ナタアシャは、傍へ来て、依然跪づいたまゝで、注意深く公爵の

手を撃つて、その上へ顔を持つて行き、そして、それへ和かに唇を觸らせながら、接吻し始めた。

「私を宥してください」と、ナタアシャは、呟語で云つて、頭を擧げて、公爵アンドレーを一寸と見た。「宥してください」

「私は貴女を愛します」と、公爵アドンレーが、云つた。

「宥してください……」

「何を宥すんです？」と、公爵アンドレーが尋いた。

「宥してください、私が爲……爲たことを」と、ナタアシャは、殆ど聞え無い、切々の呟語で呟いて、そして、幾度も、男の手へ自分の唇を和かに着けた。

「私は、前よりも、もつと多く、もつと善くお前を愛して居るんだ」と、公爵アンドレーは、云つて、自分がナタアシャの眼を見ることが能きるやうに、自分の手でナタアシャの顔を

持ち上げた。

嬉し涙の裡で動いて居るさういふ眼は、オド／＼した憐みと、喜んで居る戀愛とで、公爵ア

ンドンレーを見詰めた。唇の膨れ上がった、ナタアシャの瘡た、蒼い顔は、醜いといふより以



上であつた——それは、恐く見えた。が、公爵アンドレーエは、ナターシャの顔を見無かつた、彼は、美しかつた輝いた眼を見たのみであつた。二人は後で人の話聲を聞いた。

今は最早全然眼を覺した侍僕のピョートルは、醫者を起した。脚の疼痛の爲めに徹夜睡られ無かつたティモフィン、起つて居た總てのことを長い間熱く見て居たが、やがて、腰架の上で身體を圓くして、褥被で裸の身體を丁寧に包んで了まつた。

『いや、何うした事です?』と、醫者は云つて、床の寢床から起ち上つた。『何卒、お歸りください、ご婦人』

その途端に、戸を叩く音がした、女中が、娘を探しにと伯爵夫人からよこされたのであつた。夢の最中に起された夢遊病者のやうに、ナターシャは、部屋から歩み出、自分の小舎へ歸ると、寢床の上へ獻献あげながら倒れて了まつた。

その日から、ロストオフ家の旅行のそれから後の何の休み場所でも、宿り場所でも、ナターシャは、決してボルコオンスキイの傍を離れ無かつた、そして、醫者は、若い娘に、それ程の勇氣があり、負傷者の看護にそれ程の熟練があらうとは、全く意外であつたことを、承認せざるを得無かつた。

公爵アンドレーエが、途中で、娘の腕に抱かれたまゝで死ぬかも知れ無い(それは、醫者の言辭に依れば、随分有りさうなことであつたのだが)といふことを考へれば、それは、伯爵夫人に取つて、非常に恐ろしい事であつたけれども、伯爵夫人はナターシャに思ひ止まらすことは能き無かつた。

公爵アンドレーエとナターシャとの間に愛情的關係が復活したと共に、彼が傷が癒れば、二人の既往の約婚も復活するだらうといふ事に氣は付いて居ながらも、誰も——殊にナターシャと公爵アンドレーエは寸毫も——その事を云は無かつた。生死の未決の問題が、公爵アンドレーエの上のみならず、全露西亞の上に、懸つて居て、それが、それ以外の有らゆる考量を、閉ぢ出してしまつたのだ。

## (三十四)

ピエールは、九月三日には、遅く起きた。頭が痛く、着たまゝで睡た衣服が肌觸りが悪かつた、そして、彼は、前の晩に何か耻かしいことを爲たといふ漠然した感が心にあつた。



その何か耻かしい事といふのは、大尉ラムバルと話を爲たことであつたのだ。

彼の懐時計が、十一時であることを、彼に告げた、が、その日は、特に曇然した厭な日らしく思はれた。ビエールは、起ち上つて、眼を擦り、彫刻の爲である臺の短銃を見て——それはグラシムが、書物卓子の上へ戻して置いたのだが——ビエールは、何ういふ處に自分が居るのか、その日、自分が何ういふことを爲すべきなのか、憶ひ起した。

「最早後れたのかな？」と、ビエールは思ひ惑つた。

いゝや、「彼」は、大抵、十二時より前には、莫斯科へ入城しは爲まい。ビエールは、自分の前に横たはつて居た事柄を考へ廻す餘裕を、自分に向つて與へずに、急いで實行にかゝらうと爲た。

衣服を直して、ビエールは、短銃を取り上げ、そして、出やうと爲た。が、其所で、始めて何うすれば、手に持つので無くして、武器を街で持つて歩けるだらうか、といふことに気が付いて、思ひ惑ひ始めた。大外套の下ですらも、大きい短銃を隠すことは能きさうも無かつた。腕の下の腰帯の内でも、人の眼に付かぬやうに、隠して置くことは能き無かつた。その上に、短銃はその時には弾が入つて居無かつた、そして、ビエールは、それに弾を装める暇が無かつた。

「短銃だつて同なじだ」と、ビエールは、一人で云つた、然し、彼は、これまで、何ういふ風に自分の計畫を實行するかといふことを考へた時には、千八百〇九年の時の學生の大失策は彼が短銃でナポレオンを殺さうと爲たのにあるのだと、斷定したのは、一再のみでは無かつたのだ。

が、ビエールの主たる目的は、自分の計畫の成功するといふことよりは、寧ろ彼が自分の計畫を捨てはせずに、極力その實行を計つて居ることを、自分自身に向つて、證明するのにあつたらしかつたのだ。ビエールは、スハアレフ塔で、短銃と一緒に買った緑色の鞆の、鈍刀の、刻み目のある短銃を取つた、そして、それを直衣の下へ隠した。

農夫の外套の周圍に腰帯を締め、それから、帽子を肩深にして、ビエールは、廊下へ出て、音をさせ無いやうに、大尉の眼を覺まさ無いやうにと、静に歩いて、竊然と街へ忍び出た。

彼が、前の晩には極く平氣で見て居た火事が、夜の間に大部廣がつた。莫斯科は諸方で焼けて居た。馬車屋町の、河向だの、市場町だの、ボヴァアルスキイだのが、同時に焼けて居た、そして、ドロゴミロフ橋の傍の林木屋街だの、莫斯科川の荷船だのが、盛に燃えあがつて居た。



ビエールの路は、ボヴァアルスキイまでは横町を通り、其所からは、アルバタイを横ぎつて、ニコラ・ヤヴレンニイの禮拜堂へ行くのであった、其所をば、彼は餘程前から、彼の想像の裡で、爲事が實行されるべき場所と極めて居たのであった。何の家も大抵門も窓扉も閉めてあつた。通りにも横町にも、人が居無かつた、空には、物の焼ける嗅氣と烟があつた。時々、彼は不安さうなオド／＼した顔の露西亞人どもや、如何にも軍陣に居るらしい態で、街の真中を歩いて居る佛蘭西人どもに、行き會つた。兩方ともビエールを不思議に思つて見た。露西亞人がビエールを見詰めたのは、彼の非常に背が高く、肥つて居たことや、彼の顔及び身體全體に陰鬱な沈思と苦惱が表はれて居たことは左に右、人々には、彼が何ういふ階級の人間だか分らなかつた爲めであつた。佛蘭西人どもが、彼を不思議に思つて凝視したのは、他の露西亞人は誰でも佛蘭西人等をオヅ／＼と不思議さうに見詰めるのであつたのに、ビエールは、佛蘭西人どもを見もせずに、歩いて居たからであつたのだ。

とある家の門の所で、三人の佛蘭西人が、幾人かの露西亞人と何か諍つて居たが、露西亞人等には、佛蘭西人の言語の意味が解から無かつた、で、その佛蘭西人等は、ビエールを止めて彼に佛蘭西語を知つて居るか、何うか、尋いた。

ビエールは、頭を振つて、ズン／＼歩いて行つた。又或る横町では、緑色の彈藥函の傍に居た哨兵が、彼に怒號つた、が、その兵が今一度恐しい叫を繰り返して、銃を取り上げる音を聞いて、始めてやつと、ビエールは、街の他の側を通らなければならぬことに氣が付いたのだ。彼は、周囲の何物をも聞か無かつた、何物をも見無かつた。急ぎと、恐怖で以つて、彼は、自分の計畫をば、自分に取つては異様な恐しい事のやうに、心の裡に持つて居て、それを失つてはならぬと——前の晩の經驗から——恐れて居た。が、彼が歩を向けて居たその場所まで、彼の計畫を安全に持つて行くことは能き無い譯になつて居たのであつた。その上に、縦令が途中で止められ無かつたとした所で、彼の計畫は實行され得無かつたのだ、何故だといふと、ナポレオンは、最早四時間前に、ドロゴミロフ郊外を出て、アルバタイを横ぎつて、内廓に達し、最早その時分には、最も陰鬱な機嫌で、クレムリン宮の皇室の書齋に坐つて、直ぐに火事を消すこと、掠奪を制すること、住民を安堵させることなどの、差し掛つた命令を出して居たからであつたのだ。

が、ビエールは、左様とは少しも知ら無かつた、自分の前途に横たはつて居た事柄に全く心を占領されて、彼は、人が——爲事その者の元來の困難からでは無く、自分等の本性と相容れ



無いものであるが爲めに——自分等にとつては到底不可能であるところの或る爲事をやらうと何時までも爲て居る時に、苦しむやうな苦惱を爲て居た。彼は、自分がいよ／＼の場合に弱くなつて、自分に對する自尊心を失うだらうといふ恐慮で、惱まされた。

彼には、自分の周囲の物が、何も聞えず、見えもし無かつたに拘らず、彼は、本能的に路を見出し、そして、ボヴァアルスキイへ行く路へと間違へずに曲つた。

ビエールがボヴァアルスキイ街に近づくに従つて、烟がだん／＼濃くなり、空は大火の熱で大部熱くなつて居た。烟の舌が、屋根の彼方で、彼方此方で、燃え上つて居た。彼は、街路でだんだん多くの人々に會ひだしたが、さういふ人々は、非常に昂奮して居た。ビエールは、何か常ならぬ事が自分の周囲に起りつゝあることを感じたけれども、自分が火事場へ近寄つて居るといふ事實には氣が付か無かつた。

一方では、ボヴァアルスキイ街へ、他方では、公爵グルウジンスキイの庭園へと、續いて居る大きい廣場を横ぎつて、道路を辿つて居るうちに、ビエールは、不意に、自分の直ぐ傍で、絶望的に叫んで居る女の聲を聞いた。彼は、夢から覺めたかのやうに、ビタリと止まつた、そして、頭を擧げた。

道路の片側の枯れ切つた塵埃だらけの草の上に、家の道具の幾つもの積層が横たはつて居た、羽毛臥褥、沸茶器、聖畫、それから、箱といふ風に。箱の傍の地上に、黒い外套と帽子を着た長い突き出た前齒の、最早若くは無い女が坐つて居た。この女は、右左に身體を揺ぶつて、烈しく泣いて居ながら、何か口の裡で云つて居た。汚い、短い戸外套と外套を着た十歳から十二歳の二人の娘が、蒼い怖けた顔に呆れ返つた表情を以つて、自分たちの母親を凝視して居た。外套と、確に自分では無いらしい大きい帽子を冠つた七歳位の男の兒が、年老つた子守に抱かれて、泣いて居た。裸の脚の汚い下女が、箱の上に坐つて居た、その娘は、亞麻色の髪を垂らして、焦けた髪を抜いて、それを嗅いで居た。夫は、背の低い、屈んだ身體で、小さい輪のやうになつた頬鬚のある、頭へ眞直に冠つて居た帽子の下から髪の滑こい房が覗き出して居る、制服を着た男であつたが、それは、動かし難い顔で、箱を順々に下から動して、その下から、何か衣類を引張り出さうと爲て居た。

女は、ビエールを見るや否や、彼の脚下へ殆ど身體を投げ倒した。

「あゝ、何卒、教徒の方、私を救つてください、私に手を貸してくださいませ、親切な旦那……誰か手を貸してください」と、女は、歎歎の隙から、やう／＼云つた。「私の小さい娘です



……私の娘ですよ……私の一番小さい娘が取り残されたんですよ……焼け死にました。おおー何といふ不運にお前を育てあげたことだらうね……おおー」

「これ、静に、マリイヤ・ニコラエヅナ」と、夫は、確に、他人の前では自分を辯護するばかりの爲めらしい態で、低い聲で、妻に云つた。「姉の娘が、伴れて逃げたに違ひ無いんだよ、何うしてもそれに違ひ無いんだよ」と、彼は云ひ足した。

「鬼奴、悪黨奴」と、女が、恐しい権幕で叫んで、涙が不意に止んで了まつた。「お前さんは情といふもの無い人だ、お前さんは自分の兒に對して何の感情も無いのねえ。誰でも他の人だつたら、彼の兒を火の裡から助けたんですよ。だけでも、此奴は、鬼だ、人間ぢやア無い、父親ぢやア無い。貴下は貴族でいらつしやるわ」と、女はビエールに振り向いて、歎げながら、速語に云つた。「町が火事になりました——人が駆け込んで来て知らせて呉れましたんですよ。娘が「火事だ」と、叫びました。私どもは、自分たちの物を出さうと飛んで行きました。私どもは、着のみ着のままで、逃げました……取り出せたのは、此所にあるこれつ限りなんです……貴といふ聖畫です、私どもは小兒に氣を付けたんですよ、それから私から里から持つて来た寢床、それだけで、餘は悉皆焼いて了りました。カタイチカが見えません。おおー。あ、主よ

……で、女は再歎げだした。「私の可愛い幼兒、焼け死んだ。焼け死んだ」

「でも、何處、何處にその兒は居るんですか？」と、ビエールが云つた。

彼の氣を入れた顔の表情でもつて、女は、この人が自分に手を貸して呉れるのだと見た。

「善い、親切な旦那」と、女は金切り聲で云つて、ビエールの脚へかじり付いた。「恩人、何卒、何方にしても私に安心させてくださいましよ……アニスカ、さア、怠惰者、ご案内をしながら」と、女は、下女に向いて、怒つて口を廣く開き、長い齒を一層善く見せて、怒號つた。

「案内して呉れ、道を教へて呉れ、私は……私は……私が何か爲てあげる」と、ビエールは急いで、喘いで、云つた。

汚い下女は、箱の陰から出て来て、髪を梳き上げ、肌目の荒い、裸の足で、先に立つて、道路を歩いて行つた。

ビエールは、烈しい氣絶の後で、不意に氣が付いたかのやうな氣持が爲た。彼は、頭を擧げ、彼の眼が生命の光で輝きだし、そして、速歩で、彼は、娘の後へ随いて、娘に追ひ付いて、ボグアアルスキイ街へと行つた。街全體に、黒い烟の雲が満ちて居た。燂の舌が、さういふ雲の裡から、彼方此方で燃え上つて居た。大きい群集が火事の正面に集まつて居た。街の中央に、一



人の佛蘭西の將官が立つて、四邊の人々に何か云つて居た。下女を伴れたビエールは、佛蘭西の將官の立つて居る場所へ近寄つて居た、が、佛蘭西の兵卒等がビエールを止めた。

「通つては不可」と、聲が彼に向かつて怒號つた。

「此方へ、旦那」と、娘が怒號つた、「横町へ入つて、ニコリニイを抜けませう」

ビエールは、後へ返つた、娘と歩調を合せる爲めに時々小走になつた。娘は、街を横ぎり、左方の横町へ曲り、家を三軒通り越し、また曲がつて、右の門へと入つた。

「直ぐ其所です」と、娘は、云つて、廣場を駆け抜けて、柵の中の小さい門を開け、ビタリと立ち止まつて、眞赤に燃えあがつて居る小さい木造の家をビエールに指し示した。その一方の側は落ち込んで、他の側は焼けて居た、そして、焔が窓穴や、屋根の下から、覗き出して居た。

小さい門から入つて行くといふと、ビエールは、熱のドツと迫つて來るのを感じた、で、我にもあらずビタリと立ち止まつた。

「孰、孰がお前の家だい？」と、彼は尋いた。

「おとお——」と、下女は泣き出して、その家に指し爲た。「彼がさうなんです、彼所の彼が

私どもの家だつたんです。眞個に、貴嬢は焼け死んぢやつたのねえ、私の寶のカテイイチカ、私の大切な小さいお嬢様や、おとお——」と、アニエスカは火事を見るといふと、自分も又自分の感情を口へ出さずには居られ無くなつて、泣きだした。

ビエールは、家へと飛んで行つた、が、熱の甚かつたことと云つたら、彼がその周圍をグルリと廻らなければなら無くつて、未だ片側、屋根が焼けて居るばかりの大きい家の傍へ何時の間にか出て了まつた程であつた。佛蘭西の兵卒の一群が、その周圍にたかつて居た。

ビエールは、始のうちは、家から何か引張り出して居る佛蘭西の兵卒どもが、何を爲て居るのか、識別け得無かつた。が、自分の正面の佛蘭西の兵卒が、鈍刀の彎劍で、一人の農夫を毆つて、彼から、毛皮裏の外套を奪つて居るのを見るといふと、ビエールは、掠奪が其所で行はれて居ることに、憎平氣が付いた——が、彼は、その考想に心を止めて居る暇が無かつた。

倒れる壁や、落ちる天井の、轟といふ音、ガラ／＼といふ音、焔のドツといふ音、シユツといふ聲、それから、群集の昂奮した叫喚、烟の依違つて居る雲——此方では、黒い幾個もの塊に重なつて居、彼方では、柵引いて、輝る火花で赤く照らされて居る——の光景、此方では太い赤い束のやうに見え、彼方では、壁の面を黄金の鱗のやうに這つて居る焔、熱や、烟や、



物の速い動き方、さういふものが悉皆併せて、大火の常例の刺戟的效果を、ビエールの心に及ぼした。その効果はビエールに取つては殊に強かつた、何故だといふと、それは、火事を見るや否や、不意に、彼は、自分が、自分の上に重く押し付けて来て居たさまじくな考想から解放されたやうに感じたからであつた。彼は、若く、快活に、勢好く、勇氣に満ちた心持に爲つた。彼は、家の方へ向いた小家の部分を駆けて廻つた、そして、まだ倒れず居るその部分へ駆込まうと爲た、と、途端に、頭の直ぐ上で怒號つて居る五六人の聲を聞いた、と、それに直ぐ續いて、直ぐ傍で、何か重い物が、ガラ／＼ドタンと落ちた音が爲た。

ビエールは見返つた、と、家の窓の所に、何か金屬の物の一杯入つて居る箱の引出しを今落したばかりの、幾人かの佛蘭西の兵卒を見た。下に立つて居た今幾人かの佛蘭西の兵卒が引出しの傍へ行つた。

「おい、その野郎は何の爲めに來たんだい？」と、佛蘭西の兵卒の一人が、ビエールのことを指して、さう云つた。

「小兒が、家に居る。君等は小兒を見掛け無かつたかい？」と、ビエールが云つた。

「野郎何を歌つてやがるんだい？。行つちまへ、おい」と、聲々が怒號つた、そして、兵卒

の一人は、ビエールが自分等から銀や青銅を取つて了まはうと思つては大變だと怖れたらしく恐しい權幕でビエールへと跳び掛かつた。

「小兒？」と、上から一人の佛蘭西人が叫んだ。「庭園で何か泣いてるものがあつたにやアあつたせ。彼が其奴の幼兒かも知れ無え。少し情深くなつてやらうせ、なア」

「何處かね？」と、ビエールは尋いた。

「此方だ」と、佛蘭西の兵卒は、家の蔭の庭園へ指し爲て、窓から、ビエールに叫んだ。「待つてろ、今降りてくから」

で、間も無く、佛蘭西人——頬部に痣のある、直衣ばかりになつて居た、黒眼の男——が、實際、階下の部室の窓から跳び出して、ビエールの肩を叩いて、ビエールと一緒に庭園へと駆けた。「急げよ、朋輩たち」と、彼は、戦友等に叫んで、「危なくなりだしたぞ」

家の蔭から砂の布いてあつた路へ駆け出て、佛蘭西人は、ビエールの腕を捉へて引つ張つた、そして、圓い空地を彼に指ざした。庭園の腰架の下に、桃色の戸外衣を着た三歳程の女の兒が臥て居た。

「これがお前の幼兒だ、あゝ、小さい女の兒だな。尙結構だ」と、佛蘭西人が云つた。「左様



なら。情深くしやうや、吾々も人間なんだから、なア』で、頬部に痣のあるその佛蘭西人は、朋輩の所へと駈けて歸つた。

ビエールは、嬉しさで息も吐けずに、幼児の傍へ駈け寄つた、そして、それを抱き上げやうと爲た、が、知らぬ人を見ると、小さい女の兒——母親に極く好く似て居た、癩癩らしい、人好きの爲無い幼児——は、泣き聲を出して、逃げだした。けれども、ビエールはそれを捉まへて、抱き上げた、幼児は、甚く怒つて金切り聲を出し、小さい手で、ビエールの腕から、自分の身體をもぎ放さうと爲し、汚い、涎の垂れる口で彼に噛みつかうと爲た。ビエールは、何か小さい獸に觸つた時に感じたことのあるやうな恐怖と厭惡の感を覺えた。が、彼は骨折つて、その感に打ち勝つて、その幼児を落さ無いで、それを抱いて、大きい家へと、駈け戻らうと爲た。が、最早、同じ道路で歸ることは到底能き無かつた、下女のアニエスカは、何處にも見え無かつた、で、憐愍と厭惡の感情で以つて、ビエールは、能きだけ優しく、慫慂に泣いて居る、クツシヨリ濡れた幼児を、抱き締めて、何處か他の出路を索さうと、庭園を駈け抜けた。

## (三十四)

ビエールが、諸所の前庭や、横町を駈け抜けてから、彼の重荷を持つて、ボヴァアルスキイの隅の公爵グルウジンスキイの庭園へ戻つて行つた時に、始のうちは、自分が小兒を探しにと發つた場所を識別することが能き無かつた、其所は、人々や、諸方の家から引摺りだされた荷物で、一杯になつて居た。火から助けた道具の傍に居る露西亞人の家族の側に、此所にも又、種々な制服の可なり多くの佛蘭西の兵卒どもが居た。

ビエールは、彼等を一向眼に入れ無かつた。彼は、自分の目ざす家族を見附けて母親に小兒を渡して置いて、それから、又元へ戻つて、誰か他の者を助けるやうに爲やうと、急いで居た。ビエールには、爲無ければなら無いことが多數あつて、而もそれは速く爲無ければなら無いやうに、思はれたのであつた。熱と駈けたこと、で、勢ひ付けられて、ビエールは、その時には前に小兒を救はうと駈けて居た時に彼の心へ不意に出て來た若さ、熱心、及び勇氣の感を尙一層強く覺へた位であつた。

小兒は、最早温和しかつた、そして、小さい手でビエールの外套にかじり付き、彼の腕に坐



つて、小さい野獸のやうに、四邊を見廻して居た。

ビエールは時々その兒を見て、微弱に微笑んだ。彼は、その怖けた、弱々しい、小さい顔の裡に、恐れな無邪氣な何物かを見たやうな氣が爲たのであつた。

官吏もその妻も、ビエールがその二人と別れた場所には居無かつた。速い歩調で、ビエールは、群集の間を歩き廻つて、行き遣ふさま／＼な顔を熱く調べた。

彼が、目を付け無いでは居られ無かつたのは、新しい布の表の羊皮の外套を着、新しい靴を穿いて奇麗な東洋型の顔の極く老年の男と、同じ顔型の老婆と、若い女とで成り立つて居た。ジョルジャヤ人かアルメニヤ人の一家族であつた。一番終の者——極く若い女——が、東洋の美人の完全な模範として、ビエールを驚かした、その女は、劃然した、弓形の黒い眉で、非常に和かな、バツとした艶のある肌色で、美しい、表情の無い、楕圓な顔を持つて居た。草の生た空地の上の群集の裡へ投げ出された道具の間で、その女が、立派な八絲の外套を着、頭には、派手な薄紫色の頭巾を冠つて坐つて居るところは、雪の中へ投げ出された熱帯植物の觀があつた。女は、老婆の少し後の荷物の上に坐つて居て、長い睫毛のある、その大きい、黒い、長目な眼が、地面へと凝平と見据ゑられて居た。

確かに、女は自分の美しいことに氣が付いて居て、それが爲めに怖れて居たらしかつた。その女の顔がビエールを驚かした、で、彼は、急いで居る間で、柵の傍を通りながら、幾度も女の方を振り返つた。

柵に達しても、依然、目ざす人々を見付け兼ねて、彼は、立ち止まつて、見返つた。

ビエールの姿は、幼兒を抱いて居るので今は尙一層眼に立つた、男と女の五六人の露西亞人が、彼の周圍に集まつた。

「誰かにはぐれたですかね、旦那」。「お前さんは旦那方かね、それとも、何だね？」。「誰の幼兒だね？」と、彼等はビエールに尋いた。

ビエールは、幼兒は、小兒たちと一緒にこの場所に坐つて居た黒い外套の女のだと、答へた、そして、誰かその女を知つて居無いか、その女は何處へ行つたのか、尋いた。

「いや、それは、アンフエーロフ一家ぢや」と、老取つた補祭が、痘痕のある農婦に向いて、云つた。「主よ、我等を憐ませ給へ。主よ、我等を憐ませ給へ」と、彼は、職業の濁聲で、云ひ足した。

「アンフエーロフ一家ですつて」と、女は云つた。「あれ、アンフエーロフ一家は、今朝早くか



ら何處かへ去つて了まつたぢア無いかね。マリイヤ・ニコラアエヅナのか、イヴァーノヅナのかなんだよ』

『此の人は、女だと云ふでは無いかね、が、マリイヤ・ニコラアエヅナは貴婦人なんだせ』と、家内の隸従が云つた。

『お前が知つてるね、では、瘠せた女で——長い齒の』と、ビエールは云つた。

『え、全く、マリイヤ・ニコラアエヅナです。彼の衆は、斯ういふ狼どもが私たちの上に、推寄せて來ると直ぐ庭園へ去つて了ましましたよ』と、女は、佛蘭西の兵卒等を指しながら、云つた。

『お、主よ、我等を憐ませ給へ』と、補祭が再云ひ足した。

『彼方へ行つてご覧なさい、彼の衆は彼方に居ますよ。彼の女です、全く。彼の女は、宛然氣が狂つたやうに泣いて居ましたよ』と、女は再云つた。『彼の女なんですよ。さア、此方です』が、ビエールは、女の言語などは最早耳に入ら無かつた。最早五六秒前から、彼は、自分から五六歩離れた所で起つて居る事件を、凝乎と見詰めて居たのであつた。彼は、アルメニヤ人の一家と、それに近寄つて居た佛蘭西の兵卒等とを見て居た。さういふ兵卒の一人、敏捷な小さな

い男は、蒼色の外套を着て、帯の代りに、紐を腰へ結んで居た。その男は、頭に夜帽を冠つて居て、足は跣であつた。今一人の態容は、殊にビエールを驚かしたのだが、それは、重苦しいやうな舉作の、白痴のやうな顔付の、背の高い、圓肩の、赤髪の、瘠せた男であつた。その男は、粗羅紗のチュウニックを着、蒼色の脚袴と、大きい、破けた長靴を穿いて居た。

蒼色の外套を着た小さい跣の佛蘭西人は、アルメニヤ人たちの傍へ行くと、何か云つて、老人の脚を捉まへた、と、老人は直ぐ急いで靴を脱ぎだした。チュウニックを着た今一人の兵卒は、衣囊に手を突つ込んだまゝで、美しいアルメニヤ娘の正面で立ち止まつた、そして、物も云はず、動きもせず、娘を見詰めて居た。

『受け取れ、幼兒を受け取れ』と、ビエールは、小兒を農婦にさし付けて、命令的な急ぎで云つた。『お前から彼の人たちに渡して呉れ、お前、この兒を伴れてつて呉れ』と、彼は、女に宛然怒號り付けるやうにして、遽然しく泣き立てる小兒を地面へ置いて、佛蘭西人等とアルメニヤ人の家族とを見返つた。

老人は、最早跣で坐つて居た。小さい男は、今老人から二番目の靴を奪つたばかりのところ、彼は、その靴を兩方叩き合せて居た。老人は、歎歎きながら何か云つて居た、が、ビエー



ルは總てさういふことを唯だ一目に見たばかりであつた。彼の注意の全部は、チユウニクを着た佛蘭西人の上へ引き付けられた、その男は、その間に、悠乎とした、身體を搖るやうな歩き方で、若い女の傍へ動いて行つて、衣囊から手を出して、女の頸を捉まへて居た。

美しいアルメニヤ女は、長い睫毛を垂れて、同なじ不動の姿勢で、静乎と坐つて居て、兵卒が自分に對して爲て居た事柄を見もせず、感じもし無かつたやうに見えた。

ビエールが、佛蘭西人等と自分との間の五六歩を駆けて居る間に、チユウニクを着た背の高い兵卒が、最早アルメニヤ美人の頸から頸飾を引きもぎつて了まつて居た、と、若い女は、兩手で自分の頸を掴んで、金切り聲で叫んだ。

『その女に手を觸ける勿』と、ビエールは、憤怒で皺喰れた聲で、叫びつた、そして、背の高い、屈んだ兵卒の肩を捉まへて、突き飛ばした。その兵卒は、倒れ、起き上り、そして、逃げ去つた。が、その男の朋輩は、靴を落して、劔を抜いて、凄い權幕でビエールへと詰め寄つた。

『これ、愚行を爲る勿』と、彼は怒號つた。

ビエールは、彼が何にも覺えて居ず、そして、彼の力が十倍に増すやうな、さういふ熱狂の

忘我の境に居た。彼は、跣の佛蘭西人に跳び掛かつた、そして、その男が彎劔を抜く間の無いうちに、それを殴り倒して、拳固でさんく殴り付けた。

賛成の叫聲が周囲の群集から聞えた、と、その途端に、佛蘭西の槍騎兵の巡察隊が、角を曲つて、乗つて來た。槍騎兵は、ビエールへと速足で乗り附けた、そして、佛蘭西の兵卒等がビエールを取り圍いた。ビエールは、それから後の事件を少しも覺へて居無かつた。彼は、誰かを殴り、自分も殴られ、それから、やがて氣が付くと、自分は兩手を縛られて居て、佛蘭西の兵卒等の一群が自分の周圍に立つて、自分の衣服の中を掻き探して居ただけを、覺えて居るのみであつた。

『中尉、此奴は短劔を持つて居ます』といふのが、ビエールが、その意味を捉へた最初の言辭であつた。

『あゝ、武器だな』と、將校は云つた、そして、ビエールと一緒に捉まへられた跣の兵卒に振り向いた。

『宜しい、宜しい、お前は軍法會議で悉皆云ふが宜しい』と、將校は云つた。それから、彼はビエールに振り向いた、『お前は佛蘭西語を知つてるか?』



ビエールは血走つた眼で、四邊を見廻し、そして、何とも返答し無かつた。彼の顔は非常に恐ろしかったのであらう、何故だといふと、將校が何か低聲で云ふと、今四人の槍騎兵が、他の連中から離れて、ビエールの兩側に立つたからなのだ。

「お前は佛蘭西語が話せるか？」と、將校は、少し離れたまゝで、尋問を繰り返した。「通譯を喚べ」

隊列の裡から、平服を着た一人の小さい男が、出て來た。その衣服と言語で、ビエールは、直ぐ、それが莫斯科の何處かの商店に居た佛蘭西人であることを認めた。

「この男は普通の人間では無いらしいんです」と、ビエールを熱く査て、通譯は云つた。

「お、お、此奴は何うも放火者らしいな」と、將校は云つた。「何ういふ者だか、尋いて見ろ」と、彼は、云ひ足した。

「お前は何と云ふ者だ？」と、通譯は、彼の佛蘭西化した露西亞語で尋いた。「お前は將校には返答しなきやア不可」

「俺は俺が誰だか云はん。俺はお前の捕虜だ。さア、伴れて行け」と、ビエールは、不意に佛蘭西語で云つた。

「あゝ。あゝ」と、將校は口を挟れて、額を擧めた、「うん、では、歩るけ」

群集が槍騎兵たちの周圍に集まつた。ビエールに一番近い所に、小兒を抱いた農婦が立つて居た。巡察隊が動きたすと、その女は、歩み出た――

「あれ、何處へお前さんは伴れて行かれるんだね、親切な人？」と、女は云つた。「幼兒、若しか、彼の人たちで無かつたら、幼兒を何うしたら宜いんだらうね？」と、女は叫んだ。

「何う爲て呉れといふんだね、この女は？」と、將校が尋いた。

ビエールは酔拂つた人のやうであつた。彼の昂奮は、自分が救つた小さい女の兒を見るといふと、一層増した。

「何用かといふのか？」と、彼は云つた。「彼の女は、俺が今の先刻燭の裡から助け出した俺の娘を抱いて居るんだ」と、彼は云つた。「左様なら」で、何故さういふ目的の無い虚言を云つたのか、自分にも全然解り兼ねながら、ビエールは、佛蘭西人に圍まれて、斷乎とした、嚴肅な歩調で大跨に歩いて行つた。

槍騎兵のその巡察隊は、デユウロスネルの命令で、莫斯科の種々な街々を通つて、掠奪を止め、尙一層、高級の佛蘭西の將校間の輿論では、その日火事を起して居るといふのであつた放



火者どもを捕へることに重きを措くやうにと、派遣されたのであつた。五六の街々を巡察して、槍騎兵どもは、掠奪を行つて居た五六人の佛蘭西の兵卒の外に、商人、二人の神學生、農夫、家内の従妹といふやうな——悉皆露西亞人の——今五人の疑はしい人間を捕縛した。が、さういふ總ての嫌疑者どもの中で、ビエールが一番疑はしい人物だと、槍騎兵どもには見えたのであつた。彼等が悉皆、牢獄として極められて居たズボオフスキイ城壁の上の大きい家へと、その夜を送らせる爲めに、連れて來られた時に、ビエールは、他の者どもから引き離されて、嚴重な番兵の下に置かれたのであつた。

### 戦争と平和 第三卷終

(個製本)

大正四年二月十二日印刷  
大正四年二月十五日發行

戦争と平和 第三卷

〔非賣品〕

### 著作權所有

編輯者兼

國民文庫刊行會

東京市神田區小川町一番地

右代表者

鶴田久作

東京市本郷區西片町十番地

印刷者

中島藤太郎

東京市神田區錦町三丁目一番地

印刷所

神田印刷所

東京市神田區錦町三丁目一番地

### 發行所

電話本局四七三三番  
振替東京一八五七三番

國民文庫刊行會



F83  
To48  
130(3)

345  
120



終

